

## 東京を描いた詩について－2 えどはくカルチャー「詩の東京（全9回）」実施報告（第5回から第9回）

行 吉 正 一\*

目 次	
はじめに	②石川啄木
1. 戦中戦後の詩にみる東京	③室生犀星
はじめに	④金子光晴
(1) 戦争中の詩	おわりに
①大政翼賛会文化部・文学者愛国大会	4. 銀座をうたった詩
②日本文学報国会と『辻詩集』	はじめに
(2) 高村光太郎	(1) 銀座の歴史
①戦争詩	①江戸時代まで
②敗戦後の詩	②近代
(3) 敗戦後の詩	(2) 銀座の詩
①金子光晴	①石川啄木
②「荒地」	②北原白秋
おわりに	③吉井勇
2. 現代詩がとらえた東京の姿	④堀口大学
はじめに	⑤萩原朔太郎
(1) 黒田三郎	⑥釈迢空
(2) 石垣りん	おわりに
(3) 辻征夫	5. 新宿をうたった詩
(4) アーサー・ビナード	はじめに
おわりに	(1) 新宿の歴史
3. 浅草をうたった詩	①江戸時代
はじめに	②近代
(1) 浅草の歴史	(2) 新宿の詩
①江戸時代まで	①高村光太郎
②近代（浅草六区の娯楽）	②西条八十
(2) 浅草の詩	③サトウ・ハチロー
①北原白秋	④関根弘
	おわりに

\*元東京都江戸東京博物館学芸員

キーワード 東京、戦争詩、大政翼賛会文化部、日本文学報国会、『辻詩集』、高村光太郎、金子光晴、「荒地」、黒田三郎、石垣りん、辻征夫、アーサー・ビナード、盛り場、浅草、銀座、新宿、北原白秋、石川啄木、室生犀星、吉井勇、堀口大学、萩原朔太郎、釈道空、西条八十、サトウ・ハチロー、関根弘

## はじめに

本稿は、「えどはくカルチャー」で行った連続講座「詩の東京」(全9回)(2003年度～2014年度)のうち、第5回から第9回までの実施報告である。第1回から第4回までは、「東京都江戸東京博物館紀要第6号」(2016)に発表し、本稿は、その後半となる。

この講座は、東京を描いた詩を鑑賞すると共に、それらの詩を通して東京の歴史を説明することを目的としたものである。全9回の内容は、以下の通りである。(1)「パンの会」の詩、(2)石川啄木と宮沢賢治、(3)萩原朔太郎、(4)プロレタリア詩、(5)戦中戦後の詩、(6)現代詩、(7)浅草の詩、(8)銀座の詩、(9)新宿の詩。(1)から(6)までは、明治時代から現代に至るまで、時代順に東京を描いた詩を紹介し、(7)から(9)までは、地域別に東京を描いた詩を紹介した。

明治時代になり、日本の首都は東京となり、東京は政治・経済・文化の中心となった。詩人など文学者の多くが東京に集まり、東京は文学の中心地となっていった。彼らは、新しい時代に見合った表現方法・文体を模索し、表現する内容も、思想・政治・生活・恋愛・自然・戦争と平和など様々な内容を詩に取り込んでいった。

そのような中で、多くの詩人が東京を主題とした詩を作った。東京は魅力と刺激にあふれ、詩のテーマとなり得る都市だったのである。彼らは、それらの詩によって都市東京の魅力や歴史を伝え、東京で営まれる様々な人々の生活を描いた。

むろん、詩は芸術作品であり、客観的な記録ではなく、そこに描かれた東京は現実の東京ではなく虚構の東京である。しかし、東京を描いた詩には、その時代の東京の姿が、強く反映されていることも確かである。この講座では、東京を描いた詩が、言語による虚構の芸術作品と認めつつ、そこに現実の東京の姿を透視し、東京を描いた詩を、東京の現実の歴史と関連づけながら読んでいった。そうすることで、東京の歴史を学ぶことになり、また、東京の特徴を知ることにもなる。そして、東京という地域の歴史の蓄積の厚さを認識し、さらにその地域への愛着が湧き、その地域を大切に思う気持ちも育むことにもなる。それは、一般の方々向けの連続講座「えどはくカルチャー」の目的の一つでもあった。

また、多くの詩人が東京を描いたが、教科書も含め一般的な書籍には、意外にそれらの詩は掲載されていない。それらは、東京というあくまで一地域についての詩であり、日本中の人が鑑賞できるわけではないので割愛されていると考えられる。したがって、東京を描いた詩はあまり知られていないのも事実である。そのようなこともあり、東京を描いた詩を紹介する講座を開催した。

ここでは、連続講座「詩の東京」の第5回から第9回までの内容を加筆訂正し、再構成して報告する。

なお、全9回の講座は以下の通り実施した。

1. 詩の東京1 パンの会 –北原白秋と木下杢太郎–  
日時：2003年3月20日（木）14：00～15：30  
場所：東京都江戸東京博物館 会議室
2. 詩の東京2 石川啄木と宮沢賢治  
日時：2004年3月12日（木）14：00～15：30  
場所：東京都江戸東京博物館 会議室
3. 詩の東京3 萩原朔太郎  
日時：2008年1月24日（木）14：00～15：30  
場所：東京都江戸東京博物館 会議室
4. 詩の東京4 中野重治、プロレタリア詩人たちのうたった東京  
日時：2009年2月12日（木）14：00～15：30  
場所：東京都江戸東京博物館 会議室
5. 詩の東京5 戦中・戦後の詩にみる東京  
日時：2010年3月26日（金）14：00～15：30  
場所：東京都江戸東京博物館 会議室
6. 詩の東京6 現代詩がとらえた東京の姿  
日時：2011年5月18日（水）14：00～15：30（2011年3月25日（金）の延期）  
場所：東京都江戸東京博物館 会議室
7. 詩の東京7 浅草をうたった詩  
日時：2012年3月21日（水）14：00～15：30  
場所：東京都江戸東京博物館 会議室
8. 詩の東京8 銀座をうたった詩  
日時：2013年3月13日（水）14：00～15：30  
場所：東京都江戸東京博物館 会議室
9. 詩の東京9 新宿をうたった詩  
日時：2014年3月25日（火）14：00～15：30  
場所：東京都江戸東京博物館 会議室

## 1. 戦中戦後の詩にみる東京

はじめに

第5回目の講座では、戦中から敗戦直後の詩をとりあげた。戦中の詩としては、戦争に協力する詩、いわゆる「戦争詩」を、敗戦直後の詩としては、高村光太郎、金子光晴および詩誌「荒地」の作品を紹

介した。

昭和時代に入ると、日本経済は、ニューヨークの株暴落を契機とした世界大恐慌の打撃を受け、未曾有の「昭和恐慌」の時代に入った。国民の生活は困窮し、日本の軍部は中国大陸への進出によって経済打撃の活路を開こうと試みた。1931年（昭和6）には、中国東北（満州）への侵略戦争である満州事変を起こし、1937年（昭和12）には盧溝橋事件が勃発し、日中の全面戦争が開始された。こうして、日本は太平洋戦争へと続く8年間にわたる戦争状態に突入する。

詩壇において、いち早く戦時状況に反応したのは高村光太郎（1883（明治16）～1956年（昭和31））で、1937年（昭和12）の日中戦争のころから、戦争に協力的な戦争詩を書き始めた。高村は、戦争という国家的緊張と自己の道義的緊張とを一体化する方向に進んだのである。また、佐藤春夫（1892年（明治25）～1964年（昭和39））、三好達治（1900年（明治33）～1964年（昭和39））、草野心平（1903年（明治36）～1988年（昭和63））など、すでに詩人としての実績を残していた人たちも戦争詩を発表し始めた。1941年（昭和16）12月8日の対米開戦は、一挙にそのような状況を高め、多くの詩人たちが戦争詩を書くようになった。その背景には、大政翼賛会文化部や日本文学報国会が、戦意高揚のために行った様々な大規模かつ組織的な活動があった。戦争詩を書いた詩人の中には、かつて反戦詩を書いていた詩人も含まれ、戦争は多くの詩人たちを、戦争詩を書かざるを得ない状況に追い込んだのである。そのような時流に乗らなかったのは金子光晴（1895年（明治28）～1975年（昭和50））など少数に過ぎない。

1945年（昭和20）、国内外に大きな被害を与え、日本は戦争に敗れた。

敗戦後の日本の詩は、戦前戦中への反省から始まり、高村光太郎は自己の態度を反省する詩「暗愚小傳」を書き、岩手県花巻市で独居自炊の生活を送った。また、戦中沈黙を強いられていた金子光晴などが活動を再開し、戦争詩を書いた詩人たちも詩壇に復活し、それぞれ詩人として再出発をしていった。若い詩人たちも、敗戦を深く思慮しながら詩作を始め、「荒地」や「列島」というグループが戦後詩の出発点となっていった。

戦中戦後の詩人たちの上記のような動向は全国的に見られたが、首都東京では、典型的、象徴的な動きが展開された。「えどはくカルチャー」では、東京でのそのような状況のもとで描かれた詩を紹介した。

## （1）戦争中の詩

### ①大政翼賛会文化部・文学者愛国大会

昭和に入り、日本は戦時体制に入っていった。1931年（昭和6）には、満州事変がおこり、中国に対し軍事行動を起こし、満州を軍事的制圧下に置く。翌年には、満州国を成立させ、このことを契機として、1933年（昭和8）、国際連盟を脱退し、国際的に孤立してゆく。1937年（昭和12）には、盧溝橋事件がおこり、日中の全面戦争に発展してゆく。翌年には、国家総動員法を制定し、政府は議会の承認無しで、戦争遂行に必要な物資や労働力を動員する権限を与えられ、国民生活を全面的統制下に置いた。

そして、1940年（昭和15）10月、近衛文麿を中心に大政翼賛会が作られた。これは、政府への全国民的協力組織で、内閣総理大臣が総裁になり、道府県知事が各地の支部長となった。すべての国民をこの中に組み入れて統制し、戦争に協力させていったのである。大政翼賛会の中に文化部があり、その目標

は、「自由主義文化、個人主義文化を払拭し、高度国防国家日本の国民文化を創造し育成すること」<sup>1)</sup>であった。文学・音楽・美術・写真・漫画などすべての文化の分野における戦争協力体制が強化されていった。文化部長には、劇作家の<sup>きしだくにお</sup>岸田国士（1890～1954）が就任した。

国民の自主的な言論・文化活動は、1937年（昭和12）の日中全面戦争開始前後にはほとんど消滅し、一方で国民総動員を促進するための様々な文化団体の活動が活発化し、その運動を推進する中軸的組織が大政翼賛会文化部であったのである<sup>2)</sup>。

1941年（昭和16）12月8日、日本軍は米国のハワイ真珠湾を奇襲攻撃し、太平洋戦争が開始された。大政翼賛会文化部は、この開戦を機に全文学者による戦争への協力体制を樹立するため、1941年（昭和16）12月24日、千代田区丸の内にあった大政翼賛会会議室において「文学者愛国大会」を開催した。

この大会は、「国民儀礼」から始まった。一同敬礼の後、皇居の方角に向かい最敬礼をし、宮城遙拝をし、君が代斉唱、戦没将兵への感謝、皇軍の武運長久を記念する黙祷、最後に高浜虚子が太平洋戦争「開戦の詔書」を朗読した。そして、座長に菊池寛が推薦され会議が始められた。徳田秋声、佐々木信綱、水原秋桜子、武者小路実篤、久保田万太郎、白井喬二、吉屋信子、久米正雄、横光利一らが登壇し、それぞれ愛国の情を吐露、続いて土岐善麿、尾崎喜八、富安風生、佐藤春夫、高村光太郎などが、聖戦を賛美する自作の詩を朗読した。最後に「文学者宣言」を菊池寛が朗読し、「大会決議文」を中村武羅夫が朗読し大会が終了した。大会を終えた文学者たちは、四列縦隊を組み、会場から近い皇居前広場まで行進し「聖寿万歳」を三唱した。

「エドはくカルチャー」では、室生犀星が、このときの様子を書いた「<sup>しもべ</sup>臣らの歌」を紹介した。

## 臣らの歌 室生犀星

宮城の廣場に  
砂利の上にみんなは外套を脱ぎ  
帽子を置き  
一列にならび  
森として頭を垂れた  
みんなは少時頭をあげなかつた  
みづうみのやうな静けさ  
臣のころ  
臣のいのち  
臣の息づかひは  
かくてあたたかに結ばれた。  
臣らは宮城をことほぎ  
宮城をめぐる伽藍に似た森林に  
すゞしくひとみをそそいだ

やがて外套をひろひ  
四列になり  
宮城の廣場を過ぎた。  
さきにあるいていつたときと  
いまかへりつつある氣持ちと  
そしてこんなにいそいそした  
みんなの快い歩みはどうだ  
その日 臣らはうたつた。  
臣らのこゑはひろがつた。  
きみが代の歌  
千代に八千代の歌  
さざれいはほの歌  
われもまたかすれたる聲にて唱へり  
たらちねの日のたまゆら  
わらべの日もつかのま立ちもどり  
臣らはうたつた  
臣ら文をなすものの聲はひびいた。

【鑑賞】

- ・『筑紫日記』（小学館 1942年（昭和17）6月）所収。後に『詩集 美以久佐』（千歳書房 1943年（昭和18）7月）にも収められる。
- ・本文は、『詩集 美以久佐』（千歳書房 1943年（昭和18）7月）に依る。
- ・1941年（昭和16）12月24日に開催された文学者愛国大会後の様子を詩にしたもの。大会を終えた文学者たちが、四列縦隊を組み、会場の丸の内産業会館から近い皇居前広場まで行進し、そこで「君が代」を歌い、天皇の臣として心をつなぎ合わせたことを喜んだという詩。個性を滅し、国家の臣となることに法悦を感じ、それを詩に詠うことに喜びを感じるという精神状態であったことがわかる。
- ・室生犀星は、1889年（明治22）、石川県金沢市裏千日町に生まれ、20歳のとき上京し、以降東京で生活をした。若い頃は、人道主義に影響を受けた詩を書き、のち小説に転じたが、詩作は生涯続けた。「臣らの歌」には、戦時体制下で高揚する感情が詠われているが、この高揚感とは人道主義に陶醉した時期の作品と共通するものがある。
- ・この作品は、戦争詩を集めた詩集『評釈現代愛国詩選』（洛陽書院 1943）にも収められており、編者の江口隼人（1905～1948）が、次のように評釈している。「厳粛な拝礼を通じて、もはや個人としてのそれではなく、上に対する臣としてのつながりがあたたかく、同じ道を進むものうえにむすばれたのである。（中略）臣らという言葉の持つ不思議な感動が、この詩の背景にあることを忘れてはならない。ゆたかにして聖なるもの、その誇と殉情とがこの詩にある。」

- ・ 詩人の伊藤信吉は、犀星は、実際には文学者愛国大会には参加していなかっただろうと次のように推論している。「犀星はその日、宮城前広場へ行ったか。それともラジオ放送か、新聞の報道写真で知った情景を題材にしたか。このころは既に胃痛に悩まされていたのだから、師走の寒い宮城前広場へ出かけはしなかったろう。」<sup>3)</sup>
- ・ この詩は、1942年（昭和17）1月19日、ラジオJOAK「国民の誓い」で村山聡の朗読により全国放送された。なお、当時、戦意を昂揚させる詩は、「愛国詩」、「国民詩」と呼ばれており、兵士が戦場の体験を書いた詩が「戦争詩」と呼ばれていた。

大政翼賛会は、文化部長の岸田国土の提唱によって、朗読研究会を発足させ、詩の朗読運動を展開した。詩人による朗読会は、詩誌「明星」が開催するなど、明治時代からあるが、1929年（昭和4）にラジオ放送で詩の朗読が開始された<sup>4)</sup>。当初は戦争詩の朗読ではなかったが、戦争の勃発により次第に戦争詩が朗読されるようになり、詩はラジオをとおして戦争に協力してゆくことになる。1941年（昭和16）12月8日、日本軍の真珠湾攻撃以降、ラジオは、戦争詩朗読の放送をレギュラー番組に昇格させ、1943年（昭和18）末まで、月にほぼ10日前後のペースで、戦争詩の朗読放送が継続された。大政翼賛会は、詩歌・文学朗読用のテキストとして、様々な詩選集を刊行した。『地理の書』（1941年（昭和16））、『詩歌翼賛』（1942年（昭和17）、再版後『常盤樹』）、『愛国詩集 大詔奉載』（1942年（昭和17））、『青少年詩集 内原の朝』（1943年（昭和18））などである。これらの詩集には、当時の著名詩人の多くが作品を寄せている<sup>5)</sup>。

## ②日本文学報国会と『辻詩集』

1942年（昭和17）5月には、内閣情報局の指導により、太平洋戦争中における文学者の国策的一元組織である日本文学報国会が成立した。事務所は、麹町区永田町（首相官邸崖下）にあった。その目的は、「社団法人日本文学報国会定款」の（第二章第三条）で、次のように定められている。「本会ハ全日本文学者ノ総力ヲ結集シテ、皇国ノ伝統ト理想トヲ顕現スル日本文学ヲ確立シ、皇道文化ノ宣揚ニ翼賛スルヲ以テ目的トス」

会長は徳富蘇峰で、小説、劇文学、評論随筆、詩、短歌、俳句、国文学、外国文学の8部門からなり、詩の部会長は、高村光太郎。部会幹事長は、西条八十。詩部会の会員は300名を超えた。

日本文学報国会が行った主な事業は、3回にわたる大東亜文学者大会の開催、建艦運動を支援するための小説集『辻小説集』および詩集『辻詩集』の刊行、『国民座右銘』、『愛国百人一首』の選定、『大東亜戦争歌集』、『大東亜戦詩』の編纂、文芸報国運動講演会の開催、古典作家の顕彰祭の開催など、戦争協力を推進する事業であった。

1942年（昭和17）のミッドウェー海戦、ガダルカナル島の戦により多くの艦船が失われ、建艦計画が推進されたが、日本文学報国会では、小説部門が中心となって建艦支援活動を展開した。女流文学者会が、東京銀座松屋デパートで、色紙・短冊の即売会を行ったり、小説部会の会員の単行本未収録作品を3巻にまとめて刊行し、その印税を建艦資金として献金したりした。さらに、全会員が、原稿用紙1枚（400字）の小説を執筆し、デパート・商店のショーウィンドーに展示し、建艦献金運動の大衆化を図り、

それらの小説を雑誌・新聞等に掲載し、その原稿料を献金した。この運動は、日蓮が布教のために行なった辻説法にちなんで、「辻小説」運動と称された。そして、辻小説を集めた『辻小説集』は、1943年（昭和18）7月、日本文学報国会の編により八紘社杉山書店により刊行された。（「えどはくカルチャー」では「色紙」（網野菊）、「南溟の底」（久米正雄）を紹介したが、ここでは割愛する。）

『辻詩集』（社団法人日本文学奉公会／編）は、『辻小説集』につづいて企画されもので、建艦をテーマに書かれた「辻詩」（原稿用紙一枚、400字）、208編が収録され、1943年（昭和18）10月8日発行された。この『辻詩集』には、明治以来の大家詩人や、象徴派詩人、民衆派詩人、モダニズム詩人、プロレタリア詩人などがこぞって参加している。また、詩部会では、「艦たてまつれ『詩の夕』」の集いを神田共立講堂で開催し、その入場料を献金した。

さらに、日本文学報国会では、集まった辻小説や辻詩に挿絵を添え、渋谷の東横デパート、神田三省堂、東京堂、富山房で即売展覧会を開催し、売上金を献金した<sup>6)</sup>。

「えどはくカルチャー」では、『辻詩集』から、白鳥省吾の「大砲は生きてる」、壺井繁治「鐵瓶に寄せる歌」、西川林之助「辻詩」を紹介した。本文は、いずれも『辻詩集』（社団法人日本文学報国会1943年（昭和18）10月）に依る。

#### 大砲は生きてる 白鳥省吾

子供はまづ  
日の丸と軍艦を描いた  
青い海に煙を吐いて行く  
軍艦はいいね。

私はいつか平和の日に  
大きい軍艦の  
よく磨かれた巨砲の下に立つて  
その偉大な美に恍惚とした。

いま戦争の日  
あの巨砲は何處に吼えてゐるか  
ブツ飛ぶ千萬の雷霆何を砕くか  
撃つて撃つて撃ちまくつて  
燦然と生きてゐるぞ。

#### 【鑑賞】

・日本の軍艦の絵を描く子供を導入とし、「私」が、軍艦の大砲の美と力強さを賛美するという詩。『辻



詩集』は、建艦献金運動の一環であり、この詩集に収められた詩はすべて軍艦に関するものであった。  
・白鳥省吾は、「中野重治、プロレタリア詩人たちのうたった東京」の章で紹介したが、1890年（明治23）年に宮城県栗原郡築館町に生まれた「民衆詩派」の詩人である。アメリカの詩人ホイットマンに傾倒し、民主主義的・人道主義的な思想を深め、詩集『大地の愛』（抒情詩社 1919年（大正8）6月）などを出版し、反戦の作品を書いていたが、戦争という時代の中で、このような作品も残している。

### 鐵瓶に寄せる歌 壺井繁治

お前を古道具屋の片隅で始めて見つけた時、錆だらけだつた。俺は暇ある毎に、お前を磨た。磨くにつれて、俺の愛情はお前の肌に浸み通つて行つた。お前はどんなに親しい友達よりも、俺の親しい友達となつた。お前は至つて頑固で、無口であるが、眞赤な炭火で尻を温められると、唄を歌ひ出す。ああ、その唄を聞きながら、厳しい冬の夜を過したこと、幾歳いくとせだらう。だが、時代は更に厳しさを加へ來た。俺の茶の間にも戦争の騒音が聞えて來た。お前もいつまでも俺の茶の間で唄を歌つてはゐられないし、俺もいつまでもお前の唄を楽しんではゐられない。さあ、わが愛する南部鐵瓶よ。さやうなら。行け！あの眞赤に燃ゆる熔鑛爐の中へ！そして新しく熔かされ、叩き直されて、われらの軍艦のため、不壊の鋼鐵板となれ！お前の肌に落下する無数の敵弾を悉くはじき返せ！

#### 【鑑賞】

- ・古道具屋で手に入れ、気に入っていた南部鉄の鉄瓶を供出し、それが軍艦となり敵の弾丸をはじき返すことを願うという詩。
- ・1941年（昭和16）ころになると、戦局は悪化し、武器生産に必要な金属資源が不足してゆく。そこで、必要な金属資源の不足を補うため、官民所有の金属類回収を行う目的で金属類回収令が制定された。この法令により、学校の暖房器機や二宮尊徳像、また、家庭の鍋釜・箆筒の取手・蚊張の釣手・店の看板・寺院の梵鐘・地方鉄道のレールなど、あらゆる金属製品が回収された。
- ・壺井つばいしげじ繁治（1897年（明治30）～1975年（昭和50））は、戦前戦後の代表的なプロレタリア詩人であるが、辻詩集には、上記のような作品を書き、敗戦後、詩人で評論家の吉本隆明らから批判の対象となった。

### 辻詩 西川林之助

都會は  
無数の星座の下に  
大東亞戦の張り切つた  
銃後の地圖を擴げて  
各々の職域奉公に勵んでゐる  
街角に張られた金属回収のビラ

緊張と撃滅の人々の心は  
遠く戦地の空に走る  
淀む川邊には  
造船用の木材が蓄積されて  
やがて太平洋の荒浪に  
花々しき戦闘の勇姿を思はせる  
すぎし、青、赤、紫、黄の  
廣告燈も全く今は消えて  
歩む人々の眸は  
燦と輝き  
共存共榮の風車は  
十字の街角に  
永久あれ！ と靡<sup>なび</sup>く。

#### 【鑑賞】

- ・ 銃後の都会で展開される、様々な戦争協力の様子が描写される詩。1938年（昭和13）の国家総動員法の成立、1940年（昭和15）の大政翼賛会の創立など、全国民が戦争協力体制に組み込まれる様子を、都会を舞台に描いている。
- ・ 「職域奉公」とは、1939年（昭和14）、近衛内閣の出現と共に広まった言葉で、国民は誰でも、各職場でなすべき務めがあり、その務めを完全に果たして、天皇陛下の御民としての道を尽くすことができるという概念で、全国民を戦争に動員する施策のためのスローガンの一つ。「金属回収のビラ」は、1941年（昭和16）、制定された金属類回収令を周知するために張られたビラ。「造船用の木材」とあるが、金属船だけでなく、戦時中は、沿岸輸送用の小型船など木造船も作られた。また、「すぎし、青、赤、紫、黄の／広告塔も全く今は消えて」とあるのは、様々な色の電飾による広告塔が、金属回収令により撤去されたことを指すのであろう。「共存共榮」とは、「大東亜共榮圏」を示し、アジアを欧米の植民地支配から解放し、日本とアジアが共存共榮する新しい国際秩序を作るという考え方。
- ・ 西川林之助（1903年（明治36）～1976年（昭和51））は、奈良県に生まれた童謡詩人、民謡作詞家。詩集『見のこした夢』（1924年（大正13年））、歌集『草の囁』（1930年（昭和5））、童謡集『蛍と提灯』（1930年（昭和5））などがあり、1934年（昭和9）には、『童謡の作り方』で注目される。

## （2）高村光太郎

### ①戦争詩

高村光太郎（1883年（明治16）～1956年（昭和31））は、近代日本を代表する詩人であり、また、彫刻家でもある。父は、木彫家、高村光雲（1852年（嘉永5）～1934年（昭和9））である。光太郎は、東京市下谷区西町3番地（現：台東区上野1丁目）に生まれ、幼少から木彫を学び、東京美術学校に入

学する。卒業後、ヨーロッパ・アメリカに遊学し、彫刻家のロダンなど西欧の文化に強い刺激を受ける。帰国後は、文芸誌「スバル」に詩や評論などを載せ、「パンの会」にも参加するが、日本の旧体制と衝突し、デカダンの生活を送る。詩は、そのころから本格的に書き始めた。1911年（明治44）、長沼智恵子（1886年（明治19）～1938年（昭和13））と出会い、頽唐生活を切り抜ける。1914年（大正3）には、頽唐を超克する精神の記録でもある詩集『道程』（抒情詩社 1914年（大正3）10月）を発表し、口語自由詩の完成を示したと言われる。1914年（大正3）、智恵子との生活を始めるが、1931年（昭和6）ころから、智恵子に統合失調症の兆候が現われ、療養生活を送るようになる。智恵子は、1938年（昭和13）、53歳で病没。光太郎は、智恵子に関する詩を集めた詩集『智恵子抄』（龍星閣 1941年（昭和16）8月）を刊行する。

光太郎は、1937年（昭和12）の日中戦争ころから、戦意高揚のための戦争詩を積極的に発表し始め、1942年（昭和17）には、日本文学報国会詩部会会長となる。戦争詩をおさめた詩集として『大いなる日に』（道統社 1942年（昭和17）4月）、『おぢさんの詩』（武蔵書房 1943年（昭和18）11月）、『記録』（龍星閣 1944年（昭和19）3月）などがある。

「エドはくカルチャー」では、高村光太郎の戦争詩として「必死の時」を紹介した。

#### 必死の時 高村光太郎

必死にあり。

その時人きよくしてつよく、

その時ころ洋洋としてゆたかなのは

われら民族のならひである。

人は死をいそがねど

死は前方より迫る。

死を滅すの道ただ必死あるのみ。

必死は絶體絶命にして

そこに生死を絶つ。

必死は狡智の醜をふみにじつて

素朴にして當然なる大道をひらく。

天體は必死の理によつて分秒をたがへず、

窓前の茶の花は葉かげに白く、

卓上の一枚の桐の葉は黄に枯れて、

天然の必死のいさぎよさを私に囁く。

安きを偷むものにまどひあり、

死を免れんとするものに虚勢あり。

一切を必死に委<sup>あ</sup>するもの、  
一切を現有<sup>げんう</sup>に於て見ざるもの、  
一步は一步をすてて  
つひに無窮にいたるもの、  
かくの如きもの大なり。  
生れて必死の世にあふはよきかな、  
人その鍛錬によつて死に勝ち、  
人その極限の日常によつてまことに生く。  
未錬をすてよ、  
おもはくを恥ぢよ、  
皮肉と駄駄とをやめよ。  
そはすべて閑日月なり。  
われら現實の歴史に呼吸するもの、  
いま必死の時にあひて  
生死の區區たる我慾に生きんや。  
心空しきもの満ち、  
思ひ専らなるもの精緻なり。  
必死の境に美はあまねく、  
烈烈として芳ばしきもの、  
しづもりて光をたたふるもの、  
その境にただよふ。

ああ必死にあり。  
その時人きよくしてつよく、  
その時ころ洋洋としてゆたかなのは  
われら民族のならひである。

**【鑑賞】**

- ・1941年（昭和16）11月19日に作られた詩。初出「婦人公論」第27巻第1号（1942年（昭和17）1月）。詩集『大いなる日に』（道統社 1942年（昭和17）4月）所収。
- ・本文は、『高村光太郎全集 第二巻』（筑摩書房 1957年（昭和32）10月）に依る。
- ・この作品は、社団法人日本放送協会（現在のNHK）により、下記の日々にラジオで朗読された。1942年（昭和17）7月1日（丸山定夫の朗読）、1942年（昭和17）7月12日（丸山定夫の朗読）、1943年（昭和18）8月24日（岩田直二の朗読）<sup>7)</sup>
- ・「必死の時」とは、戦況が厳しく死が迫っている時のことで、そのような時は、自己の延命や幸福を

捨てることが、日本民族の生きる道であると説く詩。文章も文語体で、力強く鼓舞する調子を持つ。「狡智の醜」、「安きを偷むもの」、「死を免れんとするもの」、「未練」、「おもはく」、「皮肉と駄駄」、「生死の區區たる我慾」などという個人主義的な態度を否定し、それらとは対照的な心のあり方、つまり、個人の利益を捨てて、日本民族のために尽くす「必死」こそが必要なのだと説く。

- ・この品が「婦人公論」に発表されたのは、日本軍がハワイ真珠湾を攻撃し、米英に宣戦布告をした1941年（昭和16）12月8日の翌月のことである。1942年（昭和17）6月5日から7日には、ミッドウェー海戦が行われ、日本軍は4隻の空母を失い、アメリカ軍に敗れ、戦局の転機となったが、この作品が始めてラジオで朗読されたのは、その約1ヶ月後である。このように、この作品の発表やラジオでの朗読は、戦意を高揚するために、それぞれ時期が選ばれており、戦争遂行に密接に関連していたものであった。

## ②敗戦後の詩

敗戦後、高村光太郎は、岩手県花巻市郊外の<sup>ひえぬきぐん</sup>稗貫郡に粗末な小屋を建てて移り住み、ここで7年間独居自炊の生活を送った。それは戦争詩を作ったことへの自省の念から出た行動で、それを「暗愚」の歴史として告白的に書いた詩「暗愚小傳」20編が、「展望」（1947年（昭和22）7月）に発表された。そして、1950年（昭和25）10月、「暗愚小傳」などをおさめた詩集『典型』（中央公論社）を刊行する。この「暗愚小傳」をめぐっての詩人たちの反応には、すさまじいものがあり、そこに率直な反省を見る立場から、自己弁護や居直りを見る立場まで様々なとらえ方があった。

問題は、光太郎が、『道程』とそれに続く作品で強烈な近代的自我を表現し、人道的な作品を書きながら、なぜ一転して強烈な戦争詩を積極的に書いたかであるが、それは、光太郎だけでなく、戦争詩を書いた日本の詩人すべてに当てはまる問題である。

「エドはくカルチャー」では、高村光太郎の敗戦後の詩として、「暗愚小傳断片」のなかの「わが詩をよみて人死に就けり」を紹介した。

### わが詩をよみて人死に就けり（暗愚小傳断片） 高村光太郎

爆弾は私の内の前後左右に落ちた。  
電線に女の太腿がぶらさがった。  
死はいつでもそこにあつた。  
死の恐怖から私自身を救ふために  
「必死の時」を必死になつて私は書いた。  
その詩を戦地の同胞がよんだ。  
人はそれをよんで死に立ち向つた。  
その詩を毎日よみかへすと家郷へ書き送つた  
潜航艇の艇長はやがて艇と共に死んだ。

### 【鑑賞】

- ・1946年(昭和21)5月11日の日記に「余の詩をよみて人死に赴けり」を書かんとする」とある。それが、この詩と思われる。詩集『典型』(中央公論社1950年(昭和25)10月)には収められていない作品。
- ・本文は、『高村光太郎全集 第三巻』(筑摩書房1958年(昭和33)2月)に依る。
- ・「私」は、戦争詩「必死の時」を、「死の恐怖から私自身を救ふために」書いたと告白し、この詩を読んで、兵士が死んでいったことを認める詩。
- ・この詩に、光太郎の率直な反省を見るか、自己弁護や居直りを見るか、読み方は分かれる。

### (3) 敗戦後の詩

#### ①金子光晴

東京は、戦争が終わるまでに合計120回にもおよぶ空襲を受け、その被害は、死者約11万人、損害を受けた家屋約85万戸と推定される。特に1945年(昭和20)3月10日の東京大空襲では、下町地区は甚大な被害を被った。日本の無条件降伏の玉音放送が流された1945年(昭和20)8月15日、東京はほとんど廃墟と化していた。

そのような中、敗戦後の詩は、戦争詩への反省や批判から始まった。先にあげた高村光太郎の場合もそうである。また、1945年(昭和20)、戦中にプロレタリア文学運動に関わっていた作家を中心にして結成された新日本文学会は、1946年(昭和21)3月の新日本文学会東京支部創立大会で、文学における戦争責任の追及を行った。そのほかにも、多くの詩人たちが、戦争詩に対する意見を述べ、戦争詩を総括してゆこうとした。

戦争詩を書いた詩人たちは、敗戦後、次々と活動を開始したが、そのような中で、戦争中、沈黙し反戦の意思を通した詩人が復活した。金子光晴である。

金子光晴(1895年(明治28)～1975年(昭和50))は、愛知県海東郡越治村(現:愛知県津島市下切町)に生まれる。1906年(明治39)養父の東京本店転任にともない、東京に転居し、以降、約4年間のアジア・ヨーロッパ流浪の生活と、戦争中の山梨県山中湖畔での疎開を除き、東京で暮らす。口語を自由に駆使しながら、人間的な実存意識を鋭く表現した詩を作る。戦争中もひそかに反戦詩を書き、それらを敗戦後、『落下傘』(日本未来派発行所 1948年(昭和23)4月)、『蛾』(北斗書院 1948年(昭和23)9月)、『鬼の児の歌』(十字屋書店 1949年(昭和24)12月)などにまとめて発表。戦争中、戦争に加担しなかったほとんど唯一の詩人とされる。「えどはくカルチャー」では、敗戦後の東京を描いた「赤身の詩 - 東京の廃墟に」を紹介した。

#### 赤身の詩

##### 一東京の廃墟に 金子光晴

革手袋を裏返すやうに  
ずるりと皮膚をひん<sup>む</sup>剥かれて、

血管がのたうち  
神経が裸になつた掌。

風がいたい。  
空気がひりひりする。  
薬も塗らず、繃帯もしない  
赤身の掌は、

鋤ももてない。  
ペンももてない。  
なまあつたかい  
大つぶな雨が、

ふすほりながら  
霰弾のやうにはぜる。  
この刑罰をみつめてゐるのは  
おなじやうに赤裸なところ。

いつなほるのだらう？  
いつ？  
うす皮でもいゝ。  
皮ができるのは？

この掌のうへに  
玉のおもさを秤り  
この掌で  
ほかの掌を愛撫できるのは？

**【鑑賞】**

- ・詩集『非情』（新潮社 1955年（昭和30）1月）所収。
- ・本文は、『金子光晴全集 第3巻』（中央公論社 1976年（昭和51）2月）に依る。
- ・空襲を受け廃墟となった東京を、「赤身」つまり衣服を着けていないむき出しの体といい、皮膚を剥かれた掌にもたとえ、いつその掌が治るのかと問いかける詩。「皮膚を剥かれた掌」とはリアルで痛々しいが、空襲を受けて焼け野原になった荒涼たる東京の比喩として、金子らしい的確さがある。
- ・この作品では、敗戦し、廃墟になった東京の姿を見て、それを「刑罰」と表現しているが、その視点には、

日本の行った戦争が侵略戦争であり、また、自国、他国の多くの人々を死に至らしめた犯罪であることをしっかり把握した詩人の認識がうかがえる。また、最終行には、人間の最終的な幸福が、愛情を持って生活することであるという、金子の哲学が表現されている。戦争に荷担せず戦争中を過ごせた背景には、このような哲学があったのである。

## ②「荒地」

「荒地」は、敗戦後の1947年（昭和22）9月、創刊された詩の同人誌。誌名は、英国の詩人、T・S・エリオット（Thomas Stearns Eliot 1888-1965）の詩「荒地」The Waste Land にちなみ、「現代は荒地である。」という認識にたつての命名。「荒地」は、1948年（昭和23）第6号まで発刊し、1958年（昭和33）まで、年間詩集『荒地詩集』（全8巻）を刊行した。同人に、鮎川信夫、田村隆一、北村太郎、三好豊一郎、中桐雅夫、黒田三郎、木原孝一、吉本隆明、中江俊夫などがある。

彼らの詩作の背後には、自らの戦争体験と敗戦という歴史的体験があり、自らの戦争体験を凝視し、そこから人間の意味を問うという倫理的な詩作態度を強く持った。

また、彼らは、戦争中から詩的言語美を追究するモダニズムの作品を書いており、「荒地」の詩には、人間の意味を問うという倫理的な詩作態度と共に、美的芸術作品を創作するという審美的態度が存在している。そこに彼らの詩の「難解」さも存在する。

さらに、彼らの詩は、いささかも既成のイデオロギーに依らず、敗戦直後の日本の現実を直接に全体として把握し、意味を与えようとするものであり、「荒地」は、敗戦後の日本の詩の原点といってよい。

「えどはくカルチャー」では、中桐雅夫「一九四五年秋Ⅱ」、鮎川信夫「白痴」、北村太郎「センチメンタル・ジャーニー」を紹介した。

### 一九四五年秋Ⅱ 中桐雅夫

夕焼けのなかの、  
一枚の紙幣のようなくらい富士、  
その麓まで、  
あかく錆びた草が一面に繁茂し、  
たがいに絡みあって、風に身をよじらせている。  
みにくい無数の虫が、  
無数のちいさい穴を掘って、必死にかくれようとしている、  
だが、風はなにものをも見逃しはしない。

見よ、この巨大な荒地を、  
誰ひとり憩もうともせず、  
ただ歩きつづけているひとびとを、



たちどまると、そのまま息絶えるように思えて、  
なえた足をひきずりながら、  
乾いた唇をなめずりながら、  
目的もなく、  
ただ歩きつづけているひとびとの群れを。

聞け、吹きつづけている風の音を、  
一九四五年秋の一日、  
東京麹町区内幸町一丁目、  
勸業銀行ビルの四ッ角に、  
いま吹きつづけている風の音を、  
それは、まるで世界の中心から発したもののよう、  
激し、激して、ついに俺を涙ぐませるのだ。

俺は、絶望の天に向って、ゆるやかに投身する。

#### 【鑑賞】

- ・『中桐雅夫詩集』（思潮社 1964年（昭和39）12月）所収。
- ・本文は、『中桐雅夫全詩』（思潮社 1990年（平成2）3月）に依る。
- ・中桐雅夫（1919年（大正8）～1983年（昭和58））は、福岡県に生まれ、20歳まで神戸で育つ。神戸高等商業学校時代、1937年（昭和12）、18歳のころ、詩誌「ルナ」（LUNA）を創刊し、それが後の「荒地」の母体となる。神戸高等商業学校を中退し、上京する。23歳で陸軍に召集されるが、結核の初期症状と診断され、兵役免除となる。敗戦後は、読売新聞政治部の記者として定年まで過ごす。「荒地」の有力なメンバーの1人で、敗戦後の荒廃した社会のなかで文明批評・社会批評の眼を失わず、生と死の諸相を問いつづけた。W・H・オーデン（Wystan Hugh Auden 1907-1973）など英米文学の研究・翻訳も多い。
- ・この作品は、1945年（昭和20）秋、敗戦直後の日本社会の腐敗、人々の憔悴、また、東京の荒涼たる風景を描き、最後に「俺」が、絶望の天に向かって投身することで終わる。
- ・1連では、戦前の軍国主義日本を象徴する富士山を背景に、「みにくい無数の虫」、つまり、敗戦後、戦争の責任をとらなかった者たちを弾劾し、2連では、敗戦後の混乱の中、必死で生きようとする民衆を描き、3連では、空襲を受けて焼け野原になった東京の真ん中にある銀行のビルに吹きつづける強い風を受け、それが「俺」を涙ぐませ、最後に「俺」が天に向かって投身する。戦争責任、敗戦後の人々の混乱、戦争によって荒地と化した東京、それらを一身に受け止めたかのような「俺」の純粹な涙と天への投身が描かれる。敗戦の大きな悲劇を詠った詩。
- ・「東京麹町区内幸町一丁目、勸業銀行ビル」は、実在したビル。1899年（明治32）、日本勸業銀行が同

所に建ち、1929年（昭和4）には、ルネサンス様式の鉄筋コンクリート5階建ての建物が新築された。その建物は空襲を受けたが焼け残り、それがこの詩に描かれた「勸業銀行ビル」である。内幸町、丸の内一帯は、多くの銀行の本店が置かれた、日本金融の中心地である。日本金融の中心地であるだけに、焼け残った銀行のビルは、いっそう敗戦というものを強く印象づけたのである。

白痴 鮎川信夫

ひとびとが足をとめている空地には  
瓦礫のうえに材木が組立てられ  
槌の音がこだまし  
新しい建物がたちかけています  
やがてキャバレー何とか  
洋品店何々になるのでしょう  
私はほんやりと空を眺めます  
ビルの四階には午後三時から灯がともり  
踊っている男女の影がアスファルトに落ちてきます

私は裏街を好みます  
そこにはジャズがほそほそとながれ  
むかし酒場で知りあった女が  
あまり感心しない生活をしています  
無意味な時代がしずかに腐敗しています  
ある冬の晴れた日に  
私はゆっくり煙草をふかしながら  
そこを歩いてゆきました  
私の立派な人生には  
いつもそんな汚い路地があって  
破れた天井の青空が  
いつもいくらか明るいようです

日が暮れかかると  
劇場は真黒な人を吐き出します  
ふるえる電線の街の  
灰いろの建物のしたを孤独な靴音が  
もみあうおびただしい影をぬってゆきます

その孤独のこだまのなかには淋しさの本質がちょっぴりあります  
十字路には警官が立っていて  
これがほんとうの東京の街路ですが  
この街のどこもかしこも  
光りの痕跡が小さくなってゆくようです  
つかれているのは私ばかりではありません  
指輪や装身具の飾ってあるショーウィンドをのぞいて  
うつくしく欠伸をしている女がいます  
その横顔をぬすみ見ている紳士がいます

春のころ代議士候補が  
サラリーマンや労働者を相手に  
よく政府の悪口を言っていた広場には  
サーカスの看板がこがらしに吹かれています  
街路樹の枯枝に  
小鳥がとまっていることも見のがせません  
サーカスのむすめの写真をながめながら  
私はかるい舌うちをしました  
もちろん誰にも聞えるきづかいはありません  
どうやら私は今年も結婚しそこねたようです

これから私は何をしたらよいのでしょうか？  
ひとびとのうしろに行列をして夕刊を買い  
今日の出来事を  
昨日のように読みすてましようか？  
そしてニュースが私を読みすてたら  
喫茶店でコーヒーをのみ  
それからあとの計画は  
一杯のコーヒーをまえにして考えようと思うのです  
一人の若いウェイトレスが  
たまたま可愛い瞳をしていたからといって  
少しばかり恥をかくようなことがなければよいのです

【鑑賞】

・1947年（昭和22）冬に作られた詩。初出「荒地」第2巻1号（1947年（昭和22）11月）。『鮎川信夫詩

集』(荒地出版 1955年(昭和30)2月)所収。

- ・本文は、『鮎川信夫全集 第1巻 全詩集』(思潮社 1989年(平成1)3月)に依る。
- ・鮎川信夫(1920年(大正9)～1986年(昭和61))は、小石川区高田豊川町(現:文京区目白台)に生まれ、16、17歳の頃、中桐雅夫が創刊した詩誌「LUNA」に参加する。1942年(昭和17)、兵役のため早稲田大学英文科を中退し、翌年スマトラ島へ転属する。1943年(昭和18)、傷病兵として内地送還され、福井県三方の傷痍軍人療養所に入る。敗戦後、上京し、以降東京を離れず、中野・高円寺・大久保などに住む。1947年(昭和22)、詩誌「荒地」を創刊する。「荒地」の有力なメンバーの1人で、歌う詩を否定し、考える詩を主張する。
- ・経済的、政治的に復興してゆく東京の繁華な街(たとえば銀座)の裏町を、さまよいながら細かく周囲を観察する白痴「私」が描かれる。「私」はこの街を好んでいるようであるが、「私」は新しい時代、復興する街や人々、さらに自分自身に対しても、一定の距離を保ち、現実に関わらないようにしているようにもみえる。現実に関わらないことによって、より深く敗戦に至るまでの過程を考え、安易な出発を自分に戒めているかのようである。そのような態度は、外からは、「白痴」としか見られないかもしれないが、そこに一層誠実な態度が感じられる。戦争の惨禍を被った苦しみ、新しい時代への懐疑や孤独が、静かな口調(「です」「ます」調の敬体)に込められている作品。
- ・1946年(昭和21)11月3日に日本国憲法が公布され、翌年5月3日に施行された。同時に地方自治法が施行され、1947年(昭和22)4月に、衆議院議員総選挙、都議会議員および市区町村議員の選挙が行われた。「春のころ代議士候補が／サラリーマンや労働者を相手に／よく政府の悪口を言っていた広場には」という詩句は、そのことを指している。

#### センチメンタル・ジャーニー 北村太郎

滅びの群れ、  
しずかに流れる鼠のようなもの、  
ショウウィンドウにうつる冬の河。  
私は日が暮れるとひどくさみしくなり、  
銀座通りをあるく、  
空を見つめ、瀕死の光りのなかに泥の眼をかんじ、  
地下に没してゆく靴をひきずって。  
永遠に見ていたいもの、見たくないもの、  
いつも動いているもの、  
止っているもの、  
剃刀があり、裂かれる皮膚があり、  
ひろがってゆく観念があり、縮まる観念があり、  
何ものかに抵抗して、オウヴァに肩を窄める私がある。

冬の街。

なぜ人類のために、  
なぜ人類の惨めさと卑しさのために、  
私は貧しい部屋に閉じこもってられないのか。  
なぜ君は鍾りのような涙をながさないのか  
大時計の針がきっかり六時を指し、  
うつろな音が雑駘のうへの空に鳴りわたる。  
私はどうすればいいのか、  
重たい靴をはこぶ「現在」と、  
いつか、どこか解らない「終りの時」までに。  
鼠よ、君は私にとって何であり、  
君の鬣は私にとって何であるのか。  
すぎゆく一日の客の記憶、  
大時計のうしろに時間があり、  
時間のうしろに凍りついた私の人生がある。  
さびしい私の父、  
私の兄弟の蹠音がある。  
街があるき、  
地上を遍歴し、いつも渴き、いつも飢え、  
いつもどこかの街角でポケットにパンと葡萄酒をさぐりながら、  
死者の棲む大いなる境に近づきつつある。

#### 【鑑賞】

- ・1948年（昭和23）ころに作られた詩。初出「詩学」（詩学社 1949年（昭和24）6・7月号）。『北村太郎詩集』（思潮社 1966年（昭和41）11月）所収。
- ・本文は、『北村太郎の仕事1 全詩』（思潮社 1990年（平成2）4月）に依る。
- ・北村太郎（1922年（大正11）～1992年（平成4））は、東京府北豊島郡日暮里町大字谷中本801番地に生まれ、東京外国語学校に入学中、海軍に入隊し、暗号通信の傍受と分析に携わる。戦前は、中桐雅夫の詩誌「LE BALL」（「LUNA」の後身）に参加する。敗戦後は、東京大学に入学し、仏文科を卒業する。卒論は、フランスの哲学者パスカル（Blaise Pascal 1623-1662）。卒業後、朝日新聞社で働く。「荒地」の有力なメンバーの1人。敗戦後の日本の倦怠と幻滅の情緒を詩にする。後年は、詩論・詩人論も多く執筆し、また、児童文学からミステリーまで多くの翻訳も行なう。
- ・敗戦後、復興がかなり進んだ冬の銀座を、孤独のうちに歩いてゆく「私」が描かれる。「私」は1人、銀座通りの賑やかな雑踏を、重たい靴をはこびながら深い思念を展開し、また、答のない様々な問い

を発してゆく。希望は見いだせないが、生の意味、戦死した者たちの意味を問い続ける意志が示されており、そこに敗戦後の苦悩が、強く刻み込まれている。

- ・「大時計の針がきっかり六時を指し、／うつろな音が雑闇のうえの空に鳴りわたる。」とあるが、これは銀座4丁目の交差点にある和光の時計塔を示していると読める。和光の時計塔は、1894年（明治27）、服部時計店の創業者、服部金太郎が、朝野新聞社屋を買い取り、増改築をして完成させたもの。1932年（昭和7）に、ネオ・ルネサンス様式に立て替えをし、現在に至っている。空襲でも焼け残り、敗戦後は、進駐軍のP.X.（post exchange・軍人専用の物品販売、慰安提供所）として接收され、この作品が書かれた当時はP.X.であった。（P.X.としての接收が解除されるのは、1952年（昭和27）。）したがって、その大時計が6時に鳴る「うつろな音が雑闇のうえの空に鳴りわたる。」とは、まだ日本が占領下にあることを暗示している。
- ・「なぜ人類のために、／なぜ人類の惨めさと卑しさのために、／私は貧しい部屋に閉じこもってられないのか。」という詩句は、北村太郎が、大学で学んだフランスの哲学者パスカルの影響がある。この作品の中では、「私」は、人類のために、部屋の中に閉じこもってられず、「私は日が暮れるとひどくさみしくなり、／銀座通りをあるく」のだが、これは、パスカルが言った「気晴らし」（devertissement）という考え方である。パスカルによると、人間は、「われわれの不幸な状態から、われわれの思いをそらし、気を紛らわせてくれる騒ぎを求めているのである。」（『パンセ』139）そして「われわれの惨めなことを慰めてくれるただ一つのは、気を紛らわすことである。しかし、これこそ、われわれの惨めさの最大なものである」（『パンセ』171）つまり、「私」は、敗戦の苦しみに耐えられず、「気晴らし」を求めて銀座の街を彷徨してしまう。そのような弱さ、惨めさを自覚しながら、人間である「私」は、そうせざるを得ない。そして、そのような自分を受け容れながら、敗戦後の銀座の街を歩き、生や死について考え続ける。これは、敗戦後にとりうる誠意の形の一つであろう。

## おわりに

第5回目の講座では、戦中から敗戦直後の詩を紹介した。

昭和初期から敗戦までは、日本中が戦時体制に組み込まれ、政治経済など一般社会だけでなく、文学などの芸術の分野もその流れに巻き込まれた。そのため、それまで戦争に反対していた詩人も含め、ほとんどの詩人たちが戦争詩を書くこととなった。それらの詩は、敗戦後70年がたっても、研究されたり、見直されたりすることが少ない。その理由の1つは、戦争詩の質の低さに由来する。戦争協力や戦意高揚を内容とする詩は、文学作品として質が低く、研究や鑑賞に耐え得るものではない。ただ、日本や東京の歴史の中で戦争詩が書かれたことは、記録され研究されねばならず、そのような意味でもこの講座では戦争詩を紹介した。著名な詩人が、また、反戦の思想を持っていた詩人が書いた戦争詩を読むことは、今なお衝撃的であるが、なぜこのような詩を書いたのかという歴史的問いは持ち続けてゆく必要がある。

敗戦直後の詩は、多くの戦争詩が書かれたという事実から出発した。一貫して戦争協力を避け続けた

金子光晴や、何のイデオロギーにも依らず、自らの戦争経験を基に誠意を持って敗戦後社会を見つめた「荒地」の詩人たちの詩は、意義ある文学作品である。

戦争は、東京だけでなく日本中が巻き込まれた悲劇であったが、東京はその中心地であり、戦争の惨禍と復興を象徴する場所でもあった。戦前、戦争詩は日本中で書かれ、敗戦後、新しい詩も日本中で書かれたが、東京は、それらの詩の運動の中心地であった。東京を描いた戦中から敗戦直後の詩を紹介することで、戦争と平和について考える機会とした。

## 2. 現代詩がとらえた東京の姿

はじめに

第6回目の講座では、現代詩をとりあげた。現代詩は難しいと言われているが、それには、難解な表現に至る必然的な日本語の詩の歴史があり、また、現代という時代の複雑さも関係している。「エドはくカルチャー」では、比較的理解しやすい作品を選んだ。時代的には、1954年（昭和29）から始まる高度経済成長期以降の作品である。テーマとしては、東京での日常生活を描いた詩を紹介した。取り上げた作品は、黒田三郎「九月の風」、石垣りん「女湯」、辻征夫「向島金美館」、アーサー・ビナード「ぼくらの庭」の4作である。

なお、「エドはくカルチャー」では、各詩に関連する随筆も紹介したが、ここでは割愛する。

### （1）黒田三郎

黒田三郎（1919年（大正8）～1980年（昭和55））は、広島県呉市出身で、3歳からは父の故郷鹿児島市で育つ。東京大学経済学部を卒業し、南洋興発株式会社に入社、ジャワ出向中の1945年（昭和20）、現地召集で入隊した。敗戦後はNHKに入社し、1947年（昭和22）、詩誌「荒地」創刊に参加、詩や評論を発表する。

その詩は、敗戦後の社会に生きる市民の生活感情を、平明な言葉に包んだ鋭い批判精神と、にがいユーモアによって深く抉り出すものである。

最初の詩集『ひとりの女に』（昭森社 1954年（昭和29）6月）は、妻との恋愛を基に書いた恋愛詩集で、H氏賞を受賞した。H氏賞とは、新人のすぐれた詩集を広く社会に推奨することを目的とした文学賞で、日本現代詩人会が主催し、詩壇の芥川賞とも呼ばれる。また、長女ユリとの日常生活をつづる詩集『小さなユリと』（昭森社 1960年（昭和35）5月）などの詩集がある。

### 九月の風 黒田三郎

ユリはかかさずピアノに行っている？

夜は八時半にちゃんとねてる？

ねる前歯はみがいてるの？

日曜の午後の病院の面会室で  
僕の顔を見るなり  
それが妻のあいさつだ

僕は家政婦ではありませんよ  
心の中でそう言って  
僕はさり気なく  
黙っている  
うん うんと顎で答える  
さびしくなる

言葉にならないものがつかえつかえのどを下ってゆく  
お次はユリの番だ  
オトチャマいつもお酒飲む？  
沢山飲む？ ウン 飲むけど  
小さなユリがちらりと僕の顔を見る  
少しよ

夕暮の芝生の道を  
小さなユリの手をひいて  
ふりかえりながら  
僕は帰る  
妻はもう白い巨大な建物の五階の窓の小さな顔だ  
九月の風が僕と小さなユリの背中にふく

悔恨のようなものが僕の心をくじく  
人家にははや電灯がともり  
魚を焼く匂いや揚物の匂いが路地に流れる  
小さな小さなユリに  
僕は大きな声で話しかける  
新宿で御飯たべて帰ろうね ユリ

【鑑賞】

- ・詩集『ちいさなユリと』（昭森社 1960年（昭和35）5月）所収。
- ・本文は、『黒田三郎著作集 I 全詩集』（思潮社 1989年（平成1）2月）に依る。



- ・父親と幼い娘が、病気で入院している妻を見舞う様子を描いた詩。父親としては、仕事をしながら娘の世話をするのは大変であり、妻から感謝の言葉を聞きたいが、妻は、娘の世話をちゃんとしているかとばかり聞き、面白くない。しかし、娘が自分のことをかばってくれるのを聞き、父親は反省する。妻を安心させ、娘を守ろうと思ひ直し、娘のために、夕飯を食べて帰ろうと言う。一方、病気の妻は、夫が娘の世話をちゃんとしているのか不安だが、夫へも申し訳ないと思っている。病気への不安もあり、つらい病院生活を送っている。また、幼い娘も母親が居ないことを我慢し、小さいながら、精一杯、母親に心配をかけまいと、父親はお酒を飲むが少しだけだと嘘をつく。3人の親子それぞれの深い愛情を、東京を舞台に平明な言葉で描いた詩。
- ・黒田三郎は、敗戦後の1946年（昭和21）、NHKに入社し、杉並区荻窪の清風荘というアパートに住む。1948年（昭和23）、結核の診断を受け、治療をする。翌年、結婚し、1951年（昭和26）長女ユリが生まれる。1955年（昭和30）には、妻が結核を発病し、港区の白金三光町の<sup>つくしが</sup>土筆ヶ岡療養園おかりようえんに入院する。（土筆ヶ岡療養園は、1893年（明治26）、日本で初めての結核療養所で、福沢諭吉が北里柴三郎に勧めて建てたもの。）この詩の舞台を、この療養所とすれば、白金三光町の病院から自宅の荻窪へ帰ることになり、新宿で乗り換え、繁華街である新宿で夕飯を食べるということになる。
- ・詩集『ちいさなユリと』が出版された1960年（昭和35）ころの新宿は、敗戦から15年がたち、復興をほぼ果たし、日本一の繁華街になっていた。1959年（昭和34）には、営団地下鉄丸ノ内線が、新宿－池袋間に開通し、地下鉄が初めて新宿に乗り入れている。また、1960年（昭和35）は、安保反対の大衆運動が高まった時期でもある。東口は、デパートや小売店が軒を並べていたが、西口の副都心開発は成されておらず、淀橋浄水場は、まだ存在していた。夕飯を食べるというのは、東口にあるデパートや中村屋などの飲食店が想定できる。
- ・黒田三郎は、大酒飲みで、妻の入院中も、娘のユリを寝かせると、家を出て町の居酒屋へ行ってしまったという。また、お酒を飲んで大型バスにはねられ、病院に運ばれ、翌日まで意識不明になったこともある。それを聞いた入院中の妻は、激怒して退院してきたそうである。このことは、詩集『ちいさなユリと』の中の黒田自身の書いた「あとがき」や、「荒地」同人の木原孝一の文章「誤説・黒田三郎論」（『現代詩文庫6 黒田三郎』（思潮社）1968年（昭和43））に記されている。「エドはくカルチャー」では、その「あとがき」や「誤説・黒田三郎論」も紹介したが、本稿では割愛する。

## （2）石垣りん

石垣りん（1920年（大正9）～2004年（平成16））は、東京都港区赤坂に生まれる。生家は薪炭商。4歳の時に生母と死別、以後18歳の時まで4人の義母を持つといった複雑な家庭状況のなかで青春時代を送る。小学校を卒業した14歳の時に日本興業銀行に事務員として就職。以来定年の55歳まで勤務する。戦争中、生家が空襲で焼け、敗戦後は品川の借家で一家と生活をする。1970年（昭和45）には、大田区南雪谷のアパートで一人暮らしを始める。

敗戦後は、職場の労働組合運動に参加し、組合新聞などに詩を発表した。平易な言葉によって、日常生活の中のごくありふれたものをきっかけに、家族や社会、そして人間の本质に鋭く切り込んでゆく作

品を残した。

詩集に、『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』(書肆ユリイカ 1959年(昭和34)12月)、『表札など』(思潮社 1968年(昭和43)12月)(H氏賞受賞)、『略歴』(花神社 1979年(昭和54)5月)などがある。また、随筆集には、『ユーモアの鎖国』(北洋社 1973年(昭和48)2月)などがある。

## 女湯 石垣りん

一九五八年元旦の午前0時

ほかほかといちめに湯煙りをあげている公衆浴場は  
ぎつしり芋を洗う盛況。

脂と垢で茶ににごり

毛などからむ藻のようなものがただよう

湯舟の湯

を盛り上げ、あふれさせる

はいつている人間の血の多量、

それら満潮の岸に

たかだか二五円位の石鹼がかもす白い泡

新しい年にむかつて泡の中からヴィーナスが生まれる。

これは東京の、とある町の片隅

庶民のくらしのなかのはかない伝説である。

つめたい風が吹きこんで扉がひらかれる

と、ゴマジオ色のパーマネントが

あざらしのような洗い髪で外界へ出ていった

過去と未来の二枚貝のあいだから

片手を前であてて、

待っているのは竹籠の中の粗末な衣装

それこそ、彼女のケンリであった。

こうして日本のヴィーナスは

ボッティチェリが描いたよりも

古い絵の中にいる、  
文化も文明も  
まだアンモニア臭をただよわせている  
未開の  
ドロドロの浴槽である。

### 【鑑賞】

- ・詩集『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』（書肆ユリイカ 1959年（昭和34）12月）所収。
- ・本文は、『石垣りん文庫1 詩集 私の前にある鍋とお釜と燃える火と』（花神社 1988年（昭和63）2月）に依る。
- ・1958年（昭和33）元旦午前0時、東京の銭湯の女湯の様子を描いた詩。当時の大晦日の夜は、遅くまでかかって正月を迎える準備をするのが女性の役割、というのが東京の庶民生活では一般的なことであった。正月準備が終わって銭湯に行くのであるから、夜遅くなり、銭湯で、午前0時つまり元旦を迎えることになる。当時は家風呂がなく、半数以上が銭湯に通っており、銭湯は多くの客で賑わっていた。元旦の女湯は、女性の勤勉な労働の証のように汚れており、ボッティチェリが描いたヴィーナスより、日本の女性の裸体は力強いと述べる。
- ・当時の銭湯の入浴料金は、大人16円、中人（小学生）12円、小人6円であった。
- ・銭湯の起源は、仏教寺院内の施浴に始まるといわれているが、銭湯が盛んになるのは江戸時代で、江戸や大坂では都市生活者の憩いの場であった。近代以降は、娯楽の場から公衆衛生施設へと変化してゆき、敗戦後、高度経済成長期に入り都市人口が増大すると、都市部の銭湯の数は著しく増加し、1960年代にピークを迎える。しかし、その後は家風呂の普及などにより利用者が減少する。この作品が書かれたころは、最も銭湯の数が多かった時期である。公衆衛生施設とはいえ、銭湯は日々の穢れを洗い流してくれる場所であり、人々の平凡な日常のなかでは極楽浄土でもあり、非日常の空間でもあった。
- ・石垣りんは、銭湯についての詩をほかにも書いており（「銭湯で」（詩集『表札など』思潮社 1968年（昭和43）所収）、また、銭湯についての随筆も書いている。「エドはくカルチャー」では、「花嫁」（随筆集『ユーモアの鎖国』北洋社 1973年（昭和48）所収）という、銭湯の様子を描いた随筆を紹介したが、ここでは割愛する。「花嫁」の内容は以下のとおり。銭湯で見かけたことのない女性が、襟を剃ってくれと頼んでくる。カミソリを使ったことがないと断るが、簡単だからと、なお頼んでくる。聞くと、明日お嫁に行くという。若いときに病気をし婚期が遅れたが、縁あって神奈川県農家に嫁ぐという。とても感じのいい女性である。結婚式の前日、美容院にも行かず、東京で一人暮らしと思われるその女性のしおらしさ、寂しさに心打たれ、お礼を言いたいような気持ちでお祝いを述べ、襟を剃る。そして、名前も聞かず分かれた、という話である。銭湯の女湯には、東京に住む様々な女性の有り様があることを、石垣りんは鋭く受け止め、それを詩や随筆にして、私たちに示してくれたのである。

### (3) 辻征夫

辻征夫(1939年(昭和14)～2000年(平成12))は、浅草で生まれ、小学生のとき伊豆諸島の三宅島で生活した3年間を除き、向島で育つ。東京都立墨田川高等学校を経て明治大学文学部仏文科卒業。小学校の事務員、出版社(詩専門の思潮社)、都営住宅サービス公社などで勤めながら詩作をする。難病の脊髄小脳変性症により死去。享年60歳。

辻征夫の詩は、ライト・バース(軽妙で、滑稽・機知・ユーモアが意図されている詩)と言われる。ユーモラスに、あるいは皮肉めかした調子には、さりげない日常の断片の中にひそむ、人間の生の真実が鮮やかに描き出されている。

詩集に『隅田川まで』(思潮社 1977年(昭和52))、『かぜのひきかた』(草原社 1987年(昭和62))、『ヴェルレーヌの余白に』(思潮社 1990年(平成2))、『俳諧辻詩集』(思潮社 1996年(平成8))などがある。

「えどはくカルチャー」では、隅田川の思い出を書いた随筆「自伝風ないくつか 1 隅田川の水」(『現代詩文庫78 辻征夫詩集』思潮社 1982)も紹介したが、ここでは割愛する。

#### 向島金美館 辻征夫

かつて 向島金美館ありき

貴公 名はなんと申す

シラネ…

知らぬことはござるまい

名はなんと申すのだ

シラネ カニシロ

なにをあやまっておるのだ!

自分の名を知らぬのか貴公は!

ダーカラサ!

と地団太を踏んだのは

月形龍之介だっただろうか

姓ハ シラネ!

名ハ カニシロウ!

向島金美館 かつてありき



日曜日の 満員の金美館

ドアからはみだして  
背伸びしているおとなのせなか  
が見えたはず  
(あとからきたひとにはね)  
でもぼくたち町内の少年は  
行列してたおかげでちゃんと  
椅子にならんで掛けていて  
このまま小便もがまんして  
おしまいまで見なくちゃならない  
だって いちど出たら ニドトフタタビ  
はいってこれないくらい満員だからね  
それはとある宿場の旅籠屋の まよなかの  
あんどんの灯を見るよりあきらかなことだからね  
ほら子供にもよくわかる色っぽさの  
花柳小菊  
と  
思っているとき  
思わぬ方角から  
男の声がきこえました  
無愛想なこの映画館の従業員または経営者です  
《向島須崎町のつじゆきおさん  
《向島須崎町のつじゆきおさん  
《うちのひとがきてますから  
《至急入口まできてくださいー  
なにかたいへんなことが  
あったのかもしれないと  
胸騒ぎして  
六年生の長男は外に出ました  
すると家<sup>うち</sup>に寄宿していた遠縁の  
おばあちゃんが立っていました  
《おなかすいたらおたべー  
パンと  
牛乳もって



久我美子のはな声

あのはな声は

あのホクロから出すのかしら

日あたりのいい縁側のテーブル

テーブルの下のスリッパはいた

久我美子の足

が

ごによごによ

と

動いて

むきあっているスリッパはいた

男の片足

を

ごによッ

と

おさえた

(あれがラブシーンだったなんて！)

日あたりのいい縁側の

ガラス戸の外は愛の砂丘\*

だったのかな

久我美子のせりふもほかの場面<sup>シーン</sup>も

なにひとつおぼえていないけれど

忘れないのはハモニカのメロディーと

歌のことば

へソラハ

ドーシテ

アオイノカ

ヒグレノマチヲ

カラコロト

カゼガトオツテ

## ユクカラカ

－「愛の砂丘」というのがこの映画のタイトルだった。

歌には二番もあったようだが、おぼえていない。

### 【鑑賞】

- ・初出「詩と思想」23号（土曜美術社出版販売 1983年（昭和58）10月）。『かぜのひきかた』（思潮社 1987年（昭和62）5月）所収。
- ・本文は、『辻征夫詩集成』（書肆山田 1996年（平成8）4月）に依る。
- ・小学校6年生の時の、映画館、向島金美館での思い出を書いた詩。1953年（昭和28）、辻征夫が13歳のころ、母親が国立中野療養所に入院し、家事は伊勢湾台風で家を失った母方の祖母の弟夫婦が見ることになり、辻征夫の家に同居した。父親からは、妹、弟の面倒を見切れなときは連れて行くようにと、向島金美館、墨田文映など近くの映画館の切符を毎月与えられた。この作品は、そのころの思い出を書いたもの。少年が大人へとなる過渡期と、下町の向島の大衆映画館の様子を軽妙に描いている。
- ・向島金美館は、寺島町1-3（現・墨田区東向島1丁目）にあった映画館。木造1階建てで、座席定員は331名。1953年（昭和28）3月開館し、1971年（昭和46）1月閉館した。敗戦後、映画は、民衆にとってロマンチックな夢をみることのできる最大の娯楽であった。1950年代初頭から全国で、映画館の建設ラッシュが始まり映画館数・入場者数は、1950年代後半にピークを迎えた。
- ・月形龍之介（1902～1970）は、戦前から戦後にかけての時代劇スター。花柳小菊（1921～2011）は、戦前から戦後にかけての女優で、時代劇にも多く出演した。久我美子（1931～）は戦後の著名な女優。
- ・辻征夫は、向島などの下町のことを多くの詩に残している。（『隅田川まで』（思潮社 1977年（昭和52））、『誹諧辻詩集』（思潮社 1996年（平成8））など。）どれも、名所や旧跡ではなく、自分の日常生活が営まれた場所を淡々と書いており、それだからこそ余計に、その土地への愛着が感じられる。また、東京下町の人々の恬淡さも、それらの詩から感じられ、辻征夫のライト・バーズの作品には、人情深い恬淡とした、東京下町の気質がよく現われていると言える。

### （4）アーサー・ビナード

アーサー・ビナード（Arthur Binard 1967年（昭和42）～）は、アメリカ合衆国ミシガン州生まれの詩人。妻は詩人の木坂涼。ニューヨーク州のコルゲート大学で英米文学を学ぶが、漢字、日本語に興味を持ち、1990年（平成2）、卒業と同時に来日。日本語学校で教材として使用された小熊秀雄の童話『焼かれた魚』を英訳したことをきっかけに、日本語での詩作、翻訳を始める。また、文学だけでなく、現代日本の政治状況に関する講演会活動も積極的に行っている。

詩集に『釣り上げては』（思潮社 2000年（平成12）7月 中原中也賞受賞）、『左右の安全』（集英社 2007年（平成19）10月 山本健吉文学賞（詩部門））など。エッセイに『日本語ぼこりぼこり』（小学館

2005年(平成17)3月 講談社エッセイ賞受賞)など。訳詩集に『日本の名詩、英語でおどる』(みすず書房 2007年(平成19)12月)など。絵本に『ここが家だ ベンシャーンの第五福竜丸』(集英社 2006年(平成18)9月 日本絵本賞受賞)などがある。

「えどはくカルチャー」では、日本語の難しさを、ユーモアを込めて書いた随筆「花疲れ トムのランドセル」(『出世ミミズ』集英社 2006)も紹介したが、ここでは割愛する。

## ぼくらの庭 アーサー・ビナード

夢の島まで足をのばし、帰りは清澄庭園をのぞくことにした。  
初めてのはずが、入り口の脇に鎮座しているナツメ形の石を見るやいなや、デジャビュ。

「岩崎家が全国各地より蒐集した奇岩珍石が巧みに配置してあります」  
入園券の裏を読みながら池へ降りて行くと、青っぽい岩。そばにはやはり〔伊予青石〕という立て札。それから〔佐渡赤玉石〕〔加茂真黒石〕……

これはデジャビュではなく、思い出した—

ホルヘスというベネズエラ人のこと、その鷲鼻とやさしい目。  
ヨルダン人のマイク(本名はカタカナ向きではなかった)。  
いつも笑っていたキャロルという、フランス人のダンサー。  
それから、ずんぐりしたバングラデシュ人のアシラブは、授業中でも時間になると、お祈りをしだしたものだ。

かつて、日本語学校の遠足で、来たのだ。石の名前の読み方をいちいち訊いて、皆で先生を悩ましたっけ。

〔讃岐御影石〕というのに腰をおろす。池の向こう、築山の木木の上に高層ビルの頭が突き出ている。

そうだ、学期の途中でビザが切れて「フィリピンに行ってくる」と、マイクはいなくなってしまった。「アメリカへ行きたい」というアシラブは、米国大使館から書類をもらってきたのはぼくに見せたものだった。学校に通わなくなってから一度だけ、ぼくはホルヘスがギターを弾いていたバーに寄ってみた。「ラチが明かないから、韓国かどこかに……」と彼は



こぼしていた。

あれから六年ばかり。キャロルがいま踊っているのは、どこの国か。

むかしのクラスメートの名前を石にこっそり刻んでみたい。キャロルだったら〔相洲真鶴石〕。アシラブは、あそこの〔生駒石〕……

秋晴れのあの午後、だれの手がほくらを集めたのだろう。皆、庭にいつか、静かに落ち着けるだろうか。

### 【鑑賞】

- ・詩集『釣り上げては』（思潮社 2000年（平成12）7月）所収。
- ・本文は、『釣り上げては』（思潮社 2000年（平成12）7月）に依る。
- ・江東区にあるゴミ埋め立て場である「夢の島」の帰り道、江東区清澄にある清澄庭園に寄った「ほく」は、かつて、日本語学校の遠足で清澄庭園に来たことを思い出す。清澄庭園では、日本中の岩や石が集められ、その後もずっとあるが、日本語学校で学んだ「ほくたち」は、一度は東京に集まったが、また、ばらばらになってしまったと、かつての同級生たちを懐かしみ、その身を案じるという詩。
- ・清澄庭園の地は、元禄期の豪商、紀伊國屋文左衛門の屋敷があったと伝えられる。また、18世紀初頭の享保年間には、下総関宿藩主、久世氏の下屋敷となり、ある程度の庭園が築かれたと推定される。1878年（明治11年）、荒廃していた邸地を三菱財閥創業者の岩崎弥太郎が買い取り、社員の慰安や貴賓を招待する場所として「深川親睦園」を完成させた。弥太郎亡きあとも造園工事は進められ、隅田川の水を引き、また、全国から取り寄せた名石を配して「回遊式林泉庭園」が完成した。現在は、東京都立の公園となっている。庭園内には全国各地の名石55個が配置され、それらの名石の側に産地と石の種類が書かれた立札が立っている。「ほくらの庭」の中では、その立札に書いてある石の名前を先生に聞いて先生を悩ます。
- ・この作品には、「ほく」を含めて、日本語学校で学ぶ外国人が描かれている。アーサー・ビナードが来日した1990年（平成2）ころの日本は、バブル景気により労働者不足になっており、多くの外国人が日本に来て働いていた。外国人の中には、日本語学校に就学して、それを隠れ蓑として在留資格を得て、違法な就労につく者もいた。また、来日した外国人の中には、物価高などにより文化的生活を享受できず、さらに人種的な差別を受けるなど、日本での生活環境が不十分であった人々もいた。この「ほくらの庭」が書かれた背景には、そのような社会経済状況がある。この作品で見逃せないのは、多くの外国人が、せっかく東京で生活をしようと来日しても、生活のめどがたたず、東京に見切りを付け、外国に出て行くことである。東京が外国人にとって、決して住みやすい都市ではないことを、この作品は示しているとも言える。

## おわりに

第6回目の講座では、4人の現代詩人の詩を紹介した。東京を描いた現代詩は多くあるが、ここでは比較的理解しやすいものを選んだ。

これらの詩では、敗戦から復興した後の東京で生活する市井の人々が、愛情を持って描かれており、詩人たちのやさしいまなざしが感じられる。また、高度経済成長期以降、東京の社会は様々に変化しており、失われてゆくものや、新たに出てくる課題などがしっかりと詩の中に定着されている。これらの詩を読むことで、改めて現代の東京での生活や社会を見直すことができる。

## 3. 浅草をうたった詩

### はじめに

第1回目から第6回目までは、明治時代以降の東京を描いた詩を時代順に紹介したが、第7回目から第9回目の講座では、地域ごとに東京を描いた詩を紹介した。第7回目は浅草をとりあげた。

浅草は、古くから浅草寺の門前町として栄え、江戸時代には遊里や芝居小屋が移転してきたこともあって、盛り場としてにぎわった。明治時代になり、浅草は、政府により「公園」に指定され、浅草六区を中心に庶民の娯楽地として栄えた。

「えどはくカルチャー」では、近代以降の浅草を、詩人たちがどのように詩に描いたのかを紹介した。とりあげたのは、北原白秋、石川啄木、室生犀星、金子光晴の4人の詩人、明治後期から昭和前期の敗戦前までの9作品である。

### (1) 浅草の歴史

#### ①江戸時代まで

浅草は、利根川・荒川などの運ぶ土砂が堆積してできた低地で、奈良・平安時代のころ、浅草寺周辺に集落が形成された。浅草寺は飛鳥時代創建の古刹で、「浅草寺縁起」によると檜前浜成、竹成ひのくまはまなり たけなりという兄弟の漁師が、628年（推古36）、宮戸川みやとがわ（隅田川の古名）で漁をしていたとき、1寸8分の金製の観世音菩薩像を網で拾得し、兄弟の主人、土師中知宅はじのなかつもに草堂を作り、奉安したのが浅草寺の創建という。東京大空襲で焼失した本堂跡から奈良時代の瓦が発掘され、浅草寺の奈良時代存在が確認できる。家康が江戸へ入国した1590年（天正18）には、浅草は浅草寺の門前町としてかなり賑わっていたという。江戸時代に入ると、浅草寺本堂裏手の「奥山」が、江戸屈指の盛り場として賑わった。見世物小屋・水茶屋・矢場などがたち並び、辻講釈曲独楽などの大道芸も盛んで、浅草名物の浅草海苔・楊枝・浅草紙などを商う店も数多くあった。また、幕府に公認された遊郭、吉原が、明暦の大火後、1657年（明暦3）に浅草寺裏手北方に移転してきて新吉原となった。さらに、歌舞伎の芝居小屋三座（中村座、市村座、河原崎座）も天保の改革により、1842年（天保13）、浅草猿若町に移転してきた。浅草は、江戸随一の盛り場として栄えた。

## ②近代（浅草六区の娯楽）

明治政府は、近代化のため西洋の諸制度を取り入れ、その一環として、1873年（明治6）、各府県に公園設置を布告。東京府は、浅草寺・寛永寺・増上寺・深川富岡八幡・飛鳥山を公園として制定し、浅草寺境内地は「浅草公園」となった。また、1884年（明治17）、浅草公園は一区から七区に区画され、六区は江戸の盛り場の要素を受け継ぎ、近代の興業街となっていった。

幕末から明治にかけて欧米に渡った軽業師たちが、サーカスの玉乗りを見て、日本の曲芸につくりあげた「玉乗り」は、浅草の興行の中では群を抜いて有名だった。また、パノラマ館という巨大なジオラマや、凌雲閣（浅草十二階）という高所高覧施設など、新しい見世物が生まれた。そして、1903年（明治36）、常設の最初の映画館「電気館」が浅草にでき、以降、洋風の建物の常設映画館が次々と建ち、明治末期から昭和初期までは、浅草六区は最大の映画街となった。また、大正時代になると「浅草オペラ」という大衆的なオペラも流行し、様々な劇団が浅草の劇場を舞台に公演し絶大な人気を博した。

関東大震災では、下町の浅草一帯は甚大な被害を受けたが、その後も浅草は人気のある盛り場であり、たとえば、「レビュー」と呼ばれる歌・踊り・寸劇などを組み合わせた舞台芸能が人気を博した。「カジノ・フォーリー」という軽演劇の劇団が、1929年（昭和4）浅草水族館で旗揚げし、エノケンこと榎本健一が人気を博し、川端康成なども常連客だったほどである。一見、刹那的で退廃的、享乐的な軽演劇ではあったが、レビューは、戦争へ向かう時代、庶民の時局への無意識の抵抗であったとも言える。しかし、戦災により浅草は大きな被害を受け、敗戦後は盛り場としての勢いは次第に失われていった。テレビの普及により六区の映画館は次々と閉館し、現在、浅草に映画館はなくなっている。

## （2）浅草の詩

### ①北原白秋

北原白秋については、「パンの会」の章ですでに述べたが<sup>1)</sup>、1885年（明治18）、福岡県に生まれ、中学の頃より短歌を作り、1904年（明治37）、20歳のとき上京した。第1詩集『邪宗門』（易風社 1909年（明治42）3月）の出版祝いを、石川啄木と浅草で行っているなど、浅草にはしばしば通い、詩のモチーフにもしている。

「えどはくカルチャー」では、「足くび」、「焼栗のにはほひ」を紹介した。

### 足くび 北原白秋

ふらふらと酒に酔ふてさ、  
人形屋の路次を通れば  
小さな足くびが百あまり、  
薄桃いろにふくれてね、  
可哀相かはいさうに蹠あしのうらには日があたる。  
馬みちの昼あかの明るさよ、

浅草の馬道。

【鑑賞】

- ・初出「スバル」3年2号(1911年(明治44))2月1日。『思ひ出』(東雲堂書店1911年(明治44)6月)所収。
- ・本文は、『北原白秋全集2』(岩波書店1985年(昭和60)4月)に依る。
- ・昼下がり、お酒に酔って浅草の馬道の路地を通っていると、人形屋の店先に人形の小さな足首が百あまりも積んであるのが見える。それは、一種異様な光景であるが、その足裏には陽が当たっており、それを可哀想と思うという詩。昼の陽を受けた人形の薄桃色の足首が積み重ねられている様子は、酔っていただけにいっそうはっきりと見えたのである。白秋らしい感覚的な詩となっている。
- ・「抒情小曲」という短い抒情詩が、明治時代末期から大正時代にかけて多く作られ、北原白秋をはじめ、萩原朔太郎、室生犀星、西条八十、佐藤春夫などが作詩している。『思ひ出』には、二百十数編の抒情小曲が収められており、故郷柳川での少年時代を詠った詩のほか、この「足くび」のように、上京後、経験した東京の風情を詠った詩もある。
- ・浅草の馬道は、浅草寺の東側を南北に通る通りで、浅草松屋から旧吉原土手に向う通り。1907年(明治40)ころは、浅草寺付近では最も繁華な通りであった。「浅草馬道」の由来は、江戸時代から遊客が馬を利用して新吉原へ通う道筋であったことから起ったともいわれる。
- ・北原白秋らが興した「パンの会」は、馬道近くの浅草雷門にあったレストラン「よか楼」で、1911年(明治44)ころ行われている。この詩は、浅草で開催された「パンの会」も連想させる。

焼栗のほひ 北原白秋

玉乗の児よ、戯奴よ、身振をかき鈴振よ。

また、いはけなき曲馬の児、

赤き上着にとり澄ます銀笛吹きの童らよ。

げにげに汝ら、しをらしく、あるはをかしく、おもしろく、

戯れ浮かれて鄙びたる下司のしらべに忘るれど、

いづこともなき焼栗の秋のほひを嗅ぐときは

物思ふらむ嘆くらむ、かつは涙もしたたらむ。

すべり転がる玉の上に、暗き楽屋に、

汗臭き馬の背に、道化芝居の花道に、

玉蜀黍を噛みしむる、収穫の日の

盲目のわかき女に見るごとく、

物の哀れを<sup>あわ</sup>しみじみと思ひ知るらむ、浅草の秋の匂に。

### 【鑑賞】

- ・「方寸」第3巻第8号浅草号（1909年（明治42）11月10日）に、「浅草哀歌」5作品が発表され、この作品は、そのうちの4番目の作品。それが、「焼栗のほひ」と題されて、『思ひ出』（東雲堂書店1911年（明治44）6月）に収録された。「浅草哀歌」5作品のうち、『思ひ出』に収録されたのは、この作品のみ。
- ・本文は、『北原白秋全集2』（岩波書店1985年（昭和60）4月）に依る。
- ・浅草の見世物の玉乗りの子供は、楽しそうに、また、上手に芸を見せるが、秋の焼栗のにおいを嗅ぐと、故郷を思い出してか、自分自身のつらい身の上が思われ、涙するという詩。「方寸」に掲載された「浅草哀歌」5作品は、すべて、盛り場浅草の底辺で生きる子供たちを詠ったものである。
- ・浅草六区は、江戸の盛り場の要素を受け継ぎ、近代の興業街となっていたが、「玉乗り」は、浅草の興行の中では群を抜いて有名だった。特に「江川の玉乗り」は、常打ち小屋「大盛館」で興行した一座で、「第一共盛館」（のちの「大勝館」）の青木一座の「青木の玉乗り」と競い合い、関東大震災まで人気を博していた。
- ・この作品では、浅草の玉乗り芸人の子供の悲哀を主題としているが、実際、きびしく芸を教え込まれ、子供の人権を損なうものでもあった。幼い子どもたちを使つての曲芸は、哀切の情を呼ぶことで浅草の観客に受け入れられたが、子どもを使つての玉乗りは、関東大震災を契機に、大正デモクラシーの思想の普及もあって次第に衰退していった。
- ・ジャーナリストの横山源之助（1871～1915）は、評論「社会の観察」の「あれも人の子」（「毎日新聞」1895年（明治28）5月11日）で、次のように記している。「頃ろ屢々浅草公園へ行く、行けば玉乗り観せ物の前に突立ち、彼等児女の妙術如何にして是程までに至りしやを思ひて窃にわれ等讀書子の腑<sup>ふ</sup>が<sup>が</sup>ひ<sup>ひ</sup>な<sup>な</sup>き<sup>き</sup>を<sup>を</sup>常<sup>じょう</sup>と<sup>と</sup>す、<sup>しか</sup>而<sup>しか</sup>して<sup>とく</sup>篤<sup>とく</sup>と<sup>か</sup>れ<sup>れ</sup>等<sup>等</sup>児<sup>児</sup>女<sup>女</sup>の<sup>が</sup>顔<sup>がん</sup>色<sup>しよく</sup>を<sup>を</sup>視<sup>し</sup>るに一二児の外は、孰れも<sup>いづ</sup>險<sup>まぶち</sup>辺<sup>ち</sup>深<sup>ふか</sup>く<sup>く</sup>苦<sup>く</sup>悶<sup>もん</sup>を<sup>を</sup>刻<sup>く</sup>す。彼らは齒を露はして<sup>あら</sup>呵<sup>か</sup>々<sup>々</sup>大<sup>だい</sup>笑<sup>しょう</sup>し、強<sup>しい</sup>て<sup>て</sup>顔<sup>がん</sup>面<sup>めん</sup>を<sup>を</sup>四<sup>よ</sup>角<sup>かく</sup>三<sup>さん</sup>角<sup>かく</sup>に<sup>に</sup>做<sup>な</sup>し見<sup>み</sup>物<sup>ぶつ</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>喝<sup>かつ</sup>采<sup>さい</sup>を<sup>を</sup>博<sup>ひろ</sup>せんと<sup>と</sup>力<sup>ちから</sup>むるも、一番自己の役目を過くれば、面容索然、退きて声を吞むを視たるも<sup>いくたび</sup>幾<sup>いく</sup>度<sup>たび</sup>なるを知らず。」<sup>2)</sup>

### ②石川啄木

石川啄木については、「石川啄木と宮沢賢治」の章ですでに述べたが<sup>3)</sup>、1886年（明治19）、岩手県に生まれ、1908年（明治41）、22歳の時上京した。小説を書くための上京で、自然主義的な作品を書いたが、文壇では認められなかった。小説創作活動に失敗し、かつ生活も窮乏を極めていた啄木にとって、盛り場浅草は憂悶の心を慰めてくれる場所であった。啄木は、わずかな金があると一時の解放を求めて浅草に通った。それは、啄木だけでなく、多くの庶民が浅草に求めていたものであり、都市の中の盛り場が持つ役割でもある。啄木も庶民も、浅草に救われていたのである。

「エドはくカルチャー」では、啄木の短歌を紹介した。なお、「石川啄木と宮沢賢治」の章でも、浅草を詠った短歌を紹介した。

浅草<sup>りょううかく</sup>の凌雲閣<sup>りょううかく</sup>にかけのぼり息がきれしに飛び<sup>お</sup>りかねき

【鑑賞】

- ・初出「スバル」第1巻第5号(1909年(明治42)5月)。「<sup>またとふなけれ</sup>莫復問」と題して69首が掲載された中の一首。
- ・本文は、『石川啄木全集 第1巻』(筑摩書房 1978年(昭和53)5月)に依る。
- ・歌意「浅草の凌雲閣に駆け上り、息が切れてしまい、飛び降りることができなかった。」
- ・凌雲閣は、1890年(明治23)、浅草に開業した高所高覧施設であり、多数の人々で賑わった。しかし、明治40年代には、凌雲閣からの投身自殺者が出ており、それは新聞でも報道された。この作品は、そのことも下敷きになっていると考えられる。また、この作品が書かれたころ、啄木自身も、創作の上でも生活の上でも行き詰まっており、凌雲閣下の私娼窟に慰謝を求めている。浅草は、東京という大都市で圧迫される人々を様々なかたちで受け容れる場所であった。

むらさきの袖<sup>そでた</sup>垂れて  
空<sup>そら</sup>を見<sup>み</sup>あげ<sup>あ</sup>る<sup>し</sup>支那人<sup>しなじん</sup>ありき  
公園<sup>こうえん</sup>の午後<sup>ごご</sup>

【鑑賞】

- ・初出「創作」1910年(明治43)10月号。『一握の砂』(東雲堂書店 1910年(明治43)12月)所収。初出では下句は「支那人の眼のやはらかさかな」。また、この作品が、最初に作られたのは、1910年(明治43)10月13日夜で、その時は、「むらさきの袖たれて空をみあげる支那人の眼の若きかなしみ」となっていた。
- ・本文は、『石川啄木全集 第1巻』(筑摩書房 1978年(昭和53)5月)に依る。
- ・歌意「公園の午後、紫色の袖をたれた姿勢で、空を見上げている中国人がいた。」
- ・紫色は中国では高貴な色であることから、この中国人は、相当の家柄の人である可能性がある。
- ・「浅草公園」と書かれていないが、啄木が浅草公園によく行っていたこと、いわくありげな外国人がいることなどから、「浅草公園」と解釈することも可能であろう。浅草は、貴賤を問わず、あらゆる人々を受け容れてくれる「隠れ家」でもあった。

公園<sup>こうえん</sup>の隅<sup>すみ</sup>のベンチに  
二度<sup>にど</sup>ばかり見<sup>み</sup>かけ<sup>を</sup>し男<sup>をとこ</sup>  
このごろ見<sup>み</sup>えず

【鑑賞】

- ・初出「東京毎日新聞」1910年(明治43)7月28日。『一握の砂』(東雲堂書店 1910年(明治43)12月)所収。

- ・本文は、『石川啄木全集 第1巻』（筑摩書房 1978年（昭和53）5月）に依る。
- ・歌意「公園の隅にあるベンチに2度ばかり見かけた男が、このごろは現われない。どうしたのであろう。」
- ・「二度ばかり見かけし男」をこのごろ見かけないというのは、「自分」も、よくこの公園に通っていることを示す。この「男」も「自分」も、何らかの理由で社会から外れた人物で、この「公園」も「浅草公園」と解釈することが可能であろう。浅草は、社会からドロップアウトした人物を受け容れる避難所のような場所であったのである。

### ③室生犀星

室生犀星（1889年（明治22）～1962年（昭和37））は、石川県金沢市裏千日町に、私生児として生まれ、すぐに養子に出された。20歳のとき上京し、数年間は、下谷根津・本郷根津片町・谷中三崎町・千駄木林町など下町を転々とする。その間、経済的困窮から帰郷を繰り返すが、1918年（大正7）、28歳の時、田端に一戸を構える。関東大震災後、一旦帰郷するが、その後田端に戻り、1928年（昭和3）には大森谷中に、1932年（昭和7）には大森馬込町に転居し、東京での都市生活を全うした。

犀星は、初めて上京した夜、駅に出迎えてくれた美術学校の友人たちに連れられて、早速、浅草公園に行っただと言われている。また、若い時代は、十二階下の私娼窟にもしばしば出かける。しかし、青春期の放浪を終え、田端に居を構えた頃から、浅草公園からは急速に離れてゆく。浅草は犀星にとって青春放浪の場所であった。

文学面では、上京後は、北原白秋の引き立てで詩壇に登場。萩原朔太郎らと交流を結び、哀愁孤独をうたう抒情詩人として活躍した。のち小説に転じ、自らの苦しい半生を題材に自伝的小説を数多く発表した。ただ、詩作は生涯続けた。

詩集に『愛の詩集』（感情詩社 1918年（大正7）1月）、「抒情小曲集」（感情詩社 1918年（大正7）9月）、「星より来れる者」（大鐘閣 1922年（大正11）2月）などがある。また、小説には「幼年時代」（「中央公論」1919年（大正8）8月）、「性に眼覚める頃」（「中央公論」1919年（大正8）10月）、「あにいもうと」（「文藝春秋」1934年（昭和9）7月）、「杏っ子」（「東京新聞（夕刊）」1956年（昭和31）11月～1957年（昭和32）8月）、「かげろふの日記遺文」（「主婦の友」1958年（昭和33）7月～1959年（昭和34）6月）などがある。浅草を彷徨した経験を基にした短編小説には「蒼白き巢窟」（『蒼白き巢窟』新潮社 1920年（大正9）11月）、「幻影の都市」（「雄弁」1921年（大正10）1月）などがある。

#### この苦痛の前に額づく 室生犀星

よごれた寝臺から起き上ると  
自分は窓をあけて  
よい空気を取り入れた  
夜は暗くじめじめした雨になつて

塔の姿はすみのやうに黒づんでゐた  
かれは紙のやうなうすい肉體を  
痛痛しさうに身じまひした  
麻のやうにほそい腕や  
隣寸<sup>マツチ</sup>の棒のやうな手足やを  
自分は過酷な目付きで眺めた  
そのやせた胸から骨がすいて見えた  
自分はあらしのやうな恥しさを感じた  
自分は寢臺から飛び下りて  
かれのきたない靴を接吻した  
自分は床に身を投げて  
充ち互る感動に震へてゐた  
かれは呆れたやうに自分を眺めた  
自分は彼女の中に  
澄んだ きれいな性質を見た  
自分らの有<sup>も</sup>てないやうな善良な  
それは（人のいい神のやうな）文字通りなものを見たのであった  
人がよすぎると  
こんな汚ない恥さらしな  
自分の身を切賣することになるのであった  
自分はまじまじと永い間かれを眺めて  
胸をさし上つてくる  
座に堪へられない涙をかんじた  
自分は窓の方の暗いところに立つて  
じめじめしたこの界隈の屋根を眺めてゐた  
彼女は心配さうに  
私のうしろから  
私にいろいろ話しかけた  
ああ このくらやみの小路に  
まだ健全な魂の存在してゐることを  
自分はどうして信じなかつたのだらう

【鑑賞】

- ・ 初出「感情」（1917年（大正6）2月）。『愛の詩集』（感情社 1918年（大正7）1月）所収。
- ・ 本文は、『室生犀星全集 第2巻』（新潮社 1965年（昭和40）4月）に依る。



- ・十二階下の私娼窟で女性と一時を過した後、その女性の裸体を見て彼女に聖性を強く感じたという詩。そこに男性の身勝手さを指摘することもできるが、「自分」のこの感動は、まぎれもない事実であり、その感動を作品にしたもの。虐げられた女性への共感、そして、その女性の人間性の美しさへの賛美が主題となる。
- ・『愛の詩集』は、犀星が、当時耽読していたドストエフスキーやトルストイの影響が強く見られる人道主義的な詩集であり、この作品のテーマもドストエフスキーの影響が強く見られる。ドストエフスキーの小説『罪と罰』は、質屋の老婆を殺害した貧しい大学生ラスコーリニコフが、信仰篤い純真な淫売婦ソーニャに救われるという物語。娼婦のような下層の人間の中にこそ聖性がやどるというキリスト教的な考えが『罪と罰』にはあるが、犀星のこの詩の中にもその影響がみてとれる。犀星は、浅草の暗黒面を詩や小説に書いたが、それは浅草の猥雑さの中に聖なるものを感じていたからかもしれない。
- ・この作品の舞台は、「塔の姿はすみのやうに黒づんでゐた」という言葉から、浅草十二階下の私娼窟であることがわかる。浅草十二階は、1890年（明治23）、高所高覧の娯楽施設として開業し、盛り場浅草のシンボルとなったが、大正時代になると浅草十二階の下は私娼窟となっていった。

## 池 室生犀星

浅草へ行つて活動や買物や

他のいろいろなものを看てかへると

妙に淋しくなるのはどうしたものだらう

地についてゐない遊びは

あとからだんだん寂しくなる

ことに夫婦ものなど

草臥れて世にまたなく寂しげにぐつたりと

公園からかへつてゆくのをみる

そのうしろでやはり楽隊や活動の館が

紙細工のやうに灯れて聳立してゐる

あそこにある池の水にしろ

柳や櫂にしろ

みんな埃ばんで

水などはどろんとしてゐる

をりをり浮ぶ肥えくさつた緋や藍色の鯉までぶくぶく肥えた腰のやうにみえる

それが背後にうかんで見える

それゆゑなほ寂しい

【鑑賞】

- ・『星より来れる者』（大鐘閣 1922年（大正11）2月）所収。
- ・本文は、『室生犀星全集 第2巻』（新潮社 1965年（昭和40）4月）に依る。
- ・浅草で遊んだ後のむなしさを書いた詩。殊に、夫婦が浅草で映画や買物をした後、くたびれて寂しげに帰って行く様子からは、その感を強く受け、さらに、浅草の池の汚さが、浅草での遊樂のむなしさを強めていると詠う。
- ・浅草公園の庶民の、なにげない日常風景の中に人生の悲哀を見、またそこに人間に対する愛情が感じられる人道主義的な詩と言える。この詩には、美化もなにもしない浅草公園のリアルな姿が描かれており、大正時代の浅草公園の様子が鮮やかに示されている詩でもある。
- ・「池」とあるのは、浅草公園のシンボルでもあった「瓢箪池」。浅草が近代公園になるに際し、1880年（明治13）、浅草寺の奥山の見世物小屋を取り払い、西側の火除地（浅草田圃）を埋立て、そこへ見世物小屋を移転させることにしたのであるが、その際、土を調達するため掘られた池が「瓢箪池」である。浅草公園に来る多くの人びとに愛された。

④金子光晴

金子光晴（1895年（明治28）～1975年（昭和50）は、愛知県海東郡越治村大字下切甲58番戸（現：津島市下切町）に、大鹿和吉、里やう（りょう）の三男として生まれる。2歳のとき、建設業「清水組」名古屋支店長の金子荘太郎、須美の養子となる。1906年（明治39）、10歳のとき、養父の転勤で上京。暁星中学校を卒業後、早稲田大学、東京美術学校、慶應義塾大学で学ぶが、いずれも退学。24歳のとき渡欧しヨーロッパ文明への目を開かれる。1924年（大正13）、作家の森三千代（1901～1977）と結婚、2人で約4年の海外流浪の生活を経験する。戦時下には、反戦詩を書き、敗戦後も旺盛な文筆活動を展開した。透徹したニヒリズムの視点から偽善的社会を激しく批判し、強い自我を背景にヒューマニスティックな詩を書いた。

詩集に、『こがね虫』（新潮社 1923年（大正12）7月）、『鮫』（人民社 1937年（昭和12）8月）、『落下傘』（日本未来派発行所 1948年（昭和23年）4月）、『蛾』（北斗書院 1948年（昭和23）9月）、『女たちへのエレジー』（創元社 1949年（昭和24）5月）、『人間の悲劇』（創元社 1952年（昭和27）12月）、『I L』（勁草書房 1965年（昭和40）5月）、『若葉のうた』（勁草書房 1967年（昭和42）4月）など多数ある。

十二階 金子光晴

1

十二階のてつぺんに腰をかける

日曜日の眺望……は花畑だ！

さはやかな風に 塔がグラ〜する。

わたしは雲のなかに乗出してる。

見世物や 旗幟 群衆も、

こゝからは棋盤しやうぎばんの様に静だ！

……………遠眼鏡をとれ！

ツローブテイ  
Tropetitだ！ 慾望 歡樂 喧噪……………

こゝはのどかな筑波山と富士だ。

人間の韻律メロディーと 悠久の思想 その涯で、

私は その手すりしやつちよこだちで逆鋒立をした。

## 2

アーク燈が 繁樹のなかで、

こまかい靄つむを紡いでゐた。

深夜……………

『旦那！ あそんでゆきませんか？』

わたしは、酔って 酔って捨石に眠つてゐた。

愛しい夜鷹 が作り笑をして

そばに立つてゐた。

観音堂は怪異な蜘蛛の様だ 空は朱い。

公園は 森よりも荒寥としてゐた。

片足を伸すと闇空の中に突込んだ。

だが わたしは急に歎歎いた。

あの十二階が

あゝ なんといふ悲劇的な聖かな姿で

あけ方の浄罪界の空に そのとき立つてゐたことか。

私は 合掌した！。

神秘的なこの聖女體に……………。

【鑑賞】

- ・初出「聖潮」第2巻第10号 浅草特集号 (1925年 (大正14) 11月 浅草寺出版部)。本文は、この初出誌に依る。
- ・「1」では、「わたし」が、十二階の上から浅草六区の喧噪や人間の欲望を、諦観的に眺める。「2」では、深夜、浅草公園で酔って眠った「わたし」が、浅草寺の観音堂や浅草公園に、怪異で荒涼としたものを感じたが、明け方の十二階の立ち姿に神聖なものを見る。
- ・1890年 (明治23) に開業した十二階も、絶頂期は1893年 (明治26) ころまでであって、明治時代後期になると、十二階の塔上から投身者が出るようになり、大正時代に入ると、十二階の下は私娼窟となっていた。そして、1923年 (大正12) の関東大震災により、十二階は8階から折れ、赤羽工兵隊により爆破撤去された。この詩が書かれたのは、すでに十二階が撤去された後である。
- ・十二階は盛り場浅草のシンボルであったが、十二階自体のイメージは決して良いものではなかった。この詩はそのような十二階のイメージを逆手に取った、金子光晴らしい逆説的な内容となっている。「1」では、十二階のてっぺんに登ると、浅草公園に集まる人々の「欲望 歓楽 喧噪」も、「Tropetiti」(フランス語で、「あまりにも小さい」という意味) に見えると詠い、十二階が世俗を見渡す高い立場に立てる場所になっている。「2」では、足下に広がる浅草公園は「森よりも荒寥として」おり、浅草寺の観音堂でさえ「怪異な蜘蛛の様」に見え、十二階は人間の欲望を体現し汚れているように見えるが、逆にそれだからこそ「聖らかな姿」で「神秘的な」「聖女体」に見えたと詠う。十二階が「泥中の蓮」のように見えたのである。十二階は、悪いイメージを持たれていたが、それを逆手に取る金子光晴らしい作品で、そこに浅草への愛情も感じられる。

浅草十二階 金子光晴

パリーのエッフェルは、夜通し、電流の火花をちらす骸骨<sup>スケレット</sup>。

(一九一四年、不吉な豫言を世界によびかけた)

十二階は、東京名物の奇妙なすつぽん茸<sup>だけ</sup>。皮かぶりの陰莖。

螺旋階段を十二、息を喘いでのぼつてゆく私は、燈臺守になつたやうだ。

上へ近づくと、孤獨は深くなる。

頭上にひろがつて待つ、巨きな泥沼はいまや東京を涵して、

無にかへした。— 灰空だ。

十二階の頂上のみはらしのですが、風にきしんで、ぎいぎいとゆれる。

私は、雙眼鏡をかりて展望する。みわたせば、ここからは、

屋根、屋根は葱いろがかつて薄照り、雑沓は、うごかないほどしづかにみえる。

江川、青木の玉乗りの前、瓢箪池のベンチにあふむけにねてみあげてゐる

それは、もう一人の私だ。私はおどろいて、それに眼鏡を据える。  
昨夜から食べないで、吸殻をひろつては喫<sup>の</sup>んであるので、  
胸がしくしくいたんである私に。

無頼な私。親共からみはなされた私。陰毛のくらやみでうごめく  
虱のやうな私に。  
墮落した天女の、肌まもりを盗むために、家をすてて幾月日さまよつてゐる私に。

離叛した私、心にたえず荒寥と風のふきすさぶ私に。  
あけがたの淨罪界の空にそびえる十二階の、悲劇的な姿をみあげて、  
人しれず涙をすゝりあげてゐた私に。  
「お前のほんたうの姿をみたよ」と、私はいふ。  
私は眼鏡を外す。もう一人の私も消える。  
心がさわぐ。——二度とふたゝび、私は、私に出會ふ機会があるかしら。

#### 【鑑賞】

- ・未刊詩集『路傍の愛人』所収。1937年（昭和12）以前の作品と思われる。
- ・本文は、『金子光晴全集 第1巻』（中央公論社 1976年（昭和51）4月）に依る。
- ・十二階に登って、双眼鏡を借りて下を見ると、もう一人の「私」が見える。その「私」は、無頼者で浅草公園を遊び歩いているのだが、十二階の悲劇的な姿を見て泣いていたりする「私」でもある。（それは、前作「十二階」の「私」と同一人物である。）十二階の上の「私」は、そのような「ほんたうの」「私」、「もう一人の私」を発見する。双眼鏡を外すと、その「ほんたうの」「私」も消え、二度とふたたび、その「私」を見ることがないかもしれないと心が騒ぐ。
- ・この作品の前半では、十二階の様子が、様々な比喩を用いて描かれている。金子光晴は、「十二階下の女たち」（「笑の泉」1954年（昭和29）11月）に、十二階の様子、浅草公園の様子を次のように記している。「関東大震災の日までは、浅草公園の一角に、すっぽん<sup>だけ</sup>蕈のようなものが立っていた。それが有名な十二階で、煉瓦造り、まるで燈台をのぼってゆくように、ラセン階段でのぼってゆくようになっていた。のぼってゆく階段の壁には、吉原娼妓の写真額が並べてあって、それをみながらゆくことによって、足の疲れを忘れるという趣向だった。十二階塔上には、遠眼鏡屋のおばさんがいて、塔上から市中をみわたす人たちに眼鏡をかしてくれた。眼鏡のかり賃は二銭だったかと記憶する。風のある日の塔上は、ぎいぎいと揺れて安定感がない。いつかは崩れるという予想があったが、震災の時果して、中途からくずれた。」<sup>4)</sup>
- ・この作品の後半では、双眼鏡で自分の本当の姿を見るという不思議な経験が記される。このような不思議な経験ができるのも、浅草公園の、そして、十二階の不思議な魔力によるものであるかもしれない。徹底的に世俗的だからこそ、そこに聖性を見るという逆説がこの作品にも表現されている。

・2行目に「(一九一四年、不吉な豫言を世界によびかけた)」とあるが、これは、第一次大戦時に、フランスが、エッフェル塔から妨害電波をだしドイツ帝国軍を悩ませたことを示すか。

#### おわりに

第7回目の講座では、浅草を描いた4人の詩人の詩を紹介した。浅草は東京屈指の盛り場であり、詩人たちは庶民と同様、苦しさや悲しさを浅草公園で紛らわした。彼らは、浅草公園で展開される人間のあらわな姿を見つめ、それらを詩に遺した。そうすることで、人の苦しみや悲しみを昇華し、また、浅草公園という盛り場を東京の歴史の中に定着していったのである。これらの詩を読むことで、浅草という場所の魅力をいっそう強く感じることができる。

## 4. 銀座をうたった詩

### はじめに

第8回目の講座では銀座を描いた詩をとりあげた。

銀座という名称は、江戸時代に設けられた銀貨鑄造所に依っている。江戸時代の銀座は、商人・職人などが住む地域であったが、現在のような繁華な町ではなかった。しかし、明治時代になり、銀座の地域は、西洋への窓口である横浜港に通じる鉄道の新橋駅と、新政府の中心地である霞ヶ関や日比谷の官庁街に接していることから、日本でもいち早く近代化してゆき、社会文化の面で先端をゆく街へと大きく変貌していった。

「えどはくカルチャー」では、その銀座を、詩人たちはどのように詩に描いたのかを紹介した。とりあげたのは、石川啄木、北原白秋、吉井勇、堀口大学、萩原朔太郎、釈迢空の6人の詩人、明治後期から昭和中期の敗戦直後までの13作品である。

### (1) 銀座の歴史

#### ①江戸時代まで

徳川家康が江戸に入府したころ、銀座は低湿地とそれに続く海の中であり、家康の天下普請により埋め立て事業が行われ、現在の銀座の地域が誕生した。1612年(慶長17)には、銀貨鑄造所としての「銀座」が駿府から銀座に移り、「新両替町1～4丁目」(現在の銀座1丁目から4丁目までの、中央通りに面した両側)となり、別称を「銀座」と言った。ただ、江戸時代の銀座は、今日の状況とは異なり、江戸の中で特に賑わいのある場所ではなかった。それでも、多くの商人・職人が働き、様々な人が住む生活の場であり、日常の暮らしの活気があった。

#### ②近代

近代になり、銀座の地は、政治的に重要な場所であることから西洋化が早くから推し進められた。西欧の文物は船舶で横浜港に到着し、そこから鉄道で新橋までやってくる。そして、銀座を経て政治経済

の中心地である霞ヶ関・日比谷・丸の内や、外国人居留地のある築地に至る。このようなことから、銀座はいち早く近代化していったのである。1877年（明治10）には、煉瓦による不燃性洋風家屋を持つ銀座煉瓦街が完成した。不平等条約改正のため、国の表玄関として西洋風の町並みを造ったのである。そこには新しい店舗が入り、また、新聞社も集まり、自由民権運動の中心地ともなった。また、明治後期にはカフェーも開業し、モダンな飲食文化が生まれていった。関東大震災では、甚大な被害を受け、銀座煉瓦街は焼失した。しかし、帝都復興事業により復興した銀座には、多くのデパートが進出し、ウィンドウショッピングをしたりお茶を飲んだり、露店をひやかしたりする「銀ブラ」が大流行する。そのなかには、モボ（モダンボーイ）、モガ（モダンガール）と呼ばれる先端的な洋装の若者たちもいた。1934年（昭和9）には、地下鉄銀座線も開業した。しかし、戦争によって銀座は数度の空襲を受け、焼け野原となった。占領下の銀座は、PX（post exchange・軍人専用の物品販売、慰安提供所）に集る米軍兵士たちと街頭の露店商によって賑わいをとりもどした。その後、高度経済成長期に入ると、銀座の堀や川は埋め立てられ、都電も廃止され、銀座の様相は戦前と大きく変わっていったが、現在でも東京の中心的な繁華街として賑わい続けている。

## （2）銀座の詩

### ①石川啄木

石川啄木については、「石川啄木と宮沢賢治」の章ですでに述べた<sup>1)</sup>。1886年（明治19）、岩手県南岩手郡日戸村ひのとに生まれ、1908年（明治41）、22歳の時、小説を書くため上京する。しかし、小説が思うように書けず、生活も苦しくなり、1909年（明治42）3月、当時、京橋区滝山町4番地（現：中央区銀座6-6-7）にあった朝日新聞社の校正係として勤務することとなり、銀座に通うようになる。啄木は、銀座を詠った短歌を多く作っている。

なお、「エドはくカルチャー」では、啄木が銀座を詠った短歌に加え、啄木の随筆「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」（「スバル」1巻12号 1909年（明治42）12月）を紹介したが、ここでは割愛する。啄木が朝日新聞社への入社前、時間に余裕があったので銀座の裏通りを歩き、そこで素敵な老紳士を見かけたという内容である。「今迄に沢山の老人を見た。然しそれらの老人は、大抵、過度の努力をした「従来の日本」の為に年を老つたやうな人達であった。」しかし、その老人は、違ったというのである。その老人は、「背は高くなかったが、すらりとして、我々の時代の日本の富裕な老人によくある、せせこましい、或はだらしのない、或は辛うじて生きてるやうな、或は人を凌ぐやうな不愉快な体つきではなかった。」明治の近代化のために人間性を忘れて「過度の努力」をした老人にはない、余裕を持った老人と銀座で会い、快い気分になったという話である。そのような老人がいる場所が銀座であり、銀座という場所が高く評価されている内容となっている。

### 銀座を詠った短歌

あかれんぐわとほ たかべい  
赤煉瓦遠くつづける高塀の

むらさきに見えて  
春の日ながし

【鑑賞】

- ・初出「新天地」1908年（明治41）12月号。『一握の砂』（「<sup>てぶくろ</sup>手套を脱ぐ時」）東雲堂書店 1910年（明治43）所収。
- ・本文は、『石川啄木全集 第1巻 歌集』（筑摩書房 1978年（昭和53）5月）に依る。
- ・歌意「赤煉瓦が遠くまで続き、高い塀が紫色にけむって見え、春の日が長くなった。」
- ・銀座煉瓦街の赤煉瓦の高い塀が印象的に語られているが、この作品が書かれた時、銀座煉瓦街はすでに完成から30年以上がたち、煉瓦の壁も古びている。その古びた煉瓦が、初春のかすむ空気のなかで紫色に見え、美しいと詠っている。古びた煉瓦という都市ならではの新しい美を詠った歌である。
- ・なお、この作品は、啄木が東京朝日新聞社に入社する前に書いたものである。

春の雪  
銀座の裏の三階の煉瓦造に  
やはらかに降る

【鑑賞】

- ・初出「朝日新聞」1910年（明治43）5月16日。『一握の砂』（「<sup>てぶくろ</sup>手套を脱ぐ時」）東雲堂書店 1910年（明治43）所収。初出の歌は「春の雪滝山町の三階の煉瓦造によこさまに降る」。つまり、初出時は、激しい雪であったのが、歌集出版時には、柔らかな雪となり、逆の意味に作り変えている。
- ・本文は、『石川啄木全集 第1巻 歌集』（筑摩書房 1978年（昭和53）5月）に依る。
- ・歌意「春の雪が、銀座裏の煉瓦造りの3階建ての建物にやわらかに降っている。」
- ・この作品は、啄木が東京朝日新聞に就職したのちに書いたものである。
- ・「東京朝日新聞」は、1888年（明治21）7月10日、京橋区元数寄屋町（現：中央区銀座5丁目）で創刊され、同年9月に京橋区滝山町（現：中央区銀座6丁目）に移転した。啄木が1909年（明治42）3月から校正係として勤務したのは、その後、1902年（明治35）に改築された2階建て3棟の社屋で、現在その地には、次の短歌（京橋の滝山町の…）の歌碑が、啄木没後60年を記念して建てられている。
- ・啄木の勤務した朝日新聞社の社屋は、銀座煉瓦街の建物の一つで、煉瓦造2階建てであった。その社屋の窓から、同じく銀座煉瓦街の3階建の建物を見ると、少し見上げる形に見なる。
- ・「銀座の裏」といったのは、朝日新聞社社屋があったのが、銀座大通りから少し奥に入ったところにあり、銀座大通りから見ると「裏」に位置していたからであろう。ただ、現実的なことを別にすると、「銀座の裏」とすることにより、銀座といえども、大通りから少し外れた、人通りも比較的少ない場所に、春の雪が降ることになり、都会のさびしい情緒がいっそう強く醸し出されることになる。



きやうばし たきやまちやう  
京橋の滝山町の

しんぶんしゃ  
新聞社

ひ ころ  
灯ともる頃のいそがしさかな

### 【鑑賞】

- ・ 初出「朝日新聞」1910年（明治43）5月5日。『一握の砂』（「<sup>てぶくろ</sup>手套を脱ぐ時」）東雲堂書店1910年（明治43）所収。
- ・ 本文は、『石川啄木全集 第1巻 歌集』（筑摩書房1978年（昭和53）5月）に依る。
- ・ 歌意「京橋滝山町にある新聞社の夕暮れ時は、翌日の新聞発行のため、なんと忙しいことか。」
- ・ 当時の新聞は、夕刊がなく朝刊だけであった。夕方は、翌日の朝刊発行のため、忙しくなる時期である。啄木の勤務は、午後1時30分から午後5時30分ころ、第一版の刷り上がるまでが基本であり、「灯ともる頃」は、啄木の行っていた校正は、忙しくなる時間帯にあたる。
- ・ 東京朝日新聞社が建っていた跡地（中央区銀座6-6-7）に、この歌の歌碑が立てられている。

### ②北原白秋

北原白秋については、「「パンの会」の詩」、「浅草の詩」の章ですでに述べた<sup>2)</sup>。白秋は、1885年（明治18）に、福岡県山門郡沖端村（現・柳川市）に生まれ、1904年（明治37）、20歳のとき上京した。

明治後期、銀座には次々とカフェーが開業した。文学者たちの集まる「カフェー・プランタン」（1911年（明治44）創業・銀座8丁目）や、学生たちも行ける「パウリスタ」（1911年（明治44）創業・銀座6丁目）などに白秋は通っている。

白秋が東京を描いた詩を集めた『東京景物詩及其他』（東雲堂書店1913年（大正2）7月）の中に、冬の銀座に降る雨を描いた「銀座の雨」があり、この作品は有名であるが、「エドはくカルチャー」では同詩集中の「銀座歌壇」を紹介した。

### 銀座花壇 北原白秋

あか はな ちひ はな せきちく つりがねさう  
赤い花、小さい花、石竹と釣鐘草。

かなしくよるべなき無<sup>む</sup>智<sup>ち</sup>……

ガス っ  
瓦斯の点いた

くわんこうば  
勧工場のはいりくち、

明るい硝子棚、紗<sup>しや</sup>の日被<sup>ひよけ</sup>、

夏は朝から悩ましいのに

花が咲いた……あはれな石竹と釣鐘草<sup>つりがねさう</sup>。

わかい<sup>はやなぎ</sup>葉柳の<sup>アベニユ</sup>並木路、<sup>みづまき</sup>撒水した<sup>れんぐわみち</sup>煉瓦道、  
そのなかの<sup>ちひ</sup>小さな<sup>じんこうわだん</sup>人工花壇、  
(<sup>つか</sup>疲れた<sup>ひとみ</sup>瞳の<sup>ひなんしよ</sup>避難所)  
その方<sup>ほう</sup>二尺の<sup>しやく</sup>かなしい<sup>しきり</sup>区劃に、  
夏<sup>なつ</sup>がきて<sup>はな</sup>花が<sup>さ</sup>咲いた、<sup>ちひ</sup>小さい<sup>ほそ</sup>細い<sup>せきちく</sup>石竹と<sup>つりがねさう</sup>釣鐘草。

絶えず<sup>た</sup>絶えず<sup>でんしや</sup>電車が<sup>とほ</sup>通る……  
おしろい<sup>あせ</sup>汗を<sup>ふ</sup>吹く<sup>くさ</sup>草の<sup>は</sup>葉に、  
裁縫器<sup>ミシン</sup>の<sup>かす</sup>幽かな<sup>おと</sup>音に、  
よせかけた<sup>じてんしや</sup>自転車の<sup>ぎん</sup>銀の<sup>ほんしや</sup>ハンドルの<sup>はんしや</sup>反射  
日は<sup>ひ</sup>光り、  
かるい<sup>ほこり</sup>埃が<sup>うす</sup>薄い<sup>しやりん</sup>車輪を<sup>めぐ</sup>る……  
赤い<sup>あか</sup>花、<sup>ちひ</sup>小さい<sup>いほ</sup>花、<sup>いほ</sup>石竹と<sup>つりがねさう</sup>釣鐘草。

さうして<sup>おんな</sup>女が<sup>ゆく</sup>ゆく、  
すずしい<sup>しろ</sup>白の<sup>スカアト</sup>スカアト  
その手<sup>て</sup>に<sup>も</sup>持った<sup>あかがは</sup>赤皮の<sup>せうしや</sup>瀟洒な<sup>ほん</sup>洋書、  
いつかしら<sup>あせ</sup>汗ばんだ<sup>ころ</sup>ころに  
異国<sup>エキゾチック</sup>趣味な<sup>ぐわつ</sup>五月が<sup>ゆ</sup>逝く……  
新しい<sup>あた</sup>銀座の<sup>ぎんざ</sup>夏、  
かなしく<sup>じんこう</sup>よる<sup>はな</sup>べなき<sup>せきちく</sup>人工の花、——<sup>つりがねさう</sup>石竹と<sup>つりがねさう</sup>釣鐘草。

四十三年五月

### 【鑑賞】

- ・初出「文章世界」5巻8号（1910年（明治43）6月15日）。『東京景物詩及其他』（東雲堂書店 1913年（大正2）7月）所収。
- ・本文は、『白秋全集 3』（岩波書店 1985年（昭和60）5月）に依る。
- ・銀座の近代的な風物を背景に、初夏5月が過ぎ去ろうとしている時期、路上の花壇に咲く、小さくか弱い石竹と釣鐘草を描いた詩。
- ・都会的な銀座の文物として、「瓦斯」、「勸工場」、「硝子棚」、「並木路」、「撒水した煉瓦道」、「電車」、「裁縫器」、「自転車」、「洋書」などを次々と挙げ、近代的な銀座のイメージを強調している。そして、そのような近代的な文物を背景に、石竹と釣鐘草が、人工の土地である花壇で、「かなしくよるべな」く咲いていると詠ったところが、この作品の主眼であろう。人工的な都会の中の自然という、あたらしい都市情緒を詠っている。

### ③吉井勇

吉井勇（1886年（明治19）～1960年（昭和35））は、東京市芝区高輪南町に、伯爵吉井幸蔵の次男として生まれた歌人、劇作家、小説家。10代より歌作を始め、1905年（明治38）、「明星」に短歌を発表し、「明星」歌壇の雄として注目を浴びた。また、同年、北原白秋、木下杢太郎らと「パンの会」を結成し、翌年には、森鷗外を中心として創刊された「スバル」の編集にも関わる。歌風は、耽美頹唐で、歌集に第1歌集『酒ほがひ』（昴発行所 1910年（明治43））、『東京紅燈集』（新潮社 1916年（大正5）5月）などがある。1938年（昭和13）以降は、京都に居を移し、京都で没した。

「えどはくカルチャー」では、勇が銀座を詠った短歌と、短歌を含む歌物語を紹介した。

うらわかき都びとのみ知ると云ふ銀座通りの朝のかなしみ

（『酒ほがひ』所収）

このごろは日<sup>ひ</sup>毎<sup>ごと</sup>銀座<sup>ぎんざ</sup>をおとずれぬ<sup>あをやぎ</sup>青柳<sup>あやなぎ</sup>もよし<sup>しきいし</sup>舗石<sup>しきいし</sup>もよし

（『昨日まで』、『東京紅燈集』所収）

ああ銀座<sup>ぎんざ</sup>ころ浮<sup>う</sup>かれて歩<sup>あゆ</sup>みしもいつか昨日<sup>きのふ</sup>となりけるかな

（『昨日まで』、『東京紅燈集』所収）

君とわかれ銀座に出でぬうそ寒く仇びとのこと思ひながらに

（『仇情』所収）

君<sup>きみ</sup>を思<sup>おも</sup>ひわが身<sup>み</sup>を忘<sup>わす</sup>れ世<sup>よ</sup>を忘<sup>わす</sup>れ銀座<sup>ぎんざ</sup>いそげば雨<sup>あめ</sup>こぼれ來<sup>き</sup>ぬ

（『東京紅燈集』所収）

### 【鑑賞】

- ・上記の短歌は、吉井勇が、1905年（明治38）から1916年（大正5）にかけて、ほぼ20歳代の時に書いたものである。青春の放埒や恋愛感情などの経験が、関東大震災以前、銀座煉瓦街がまだあった時代の銀座を舞台に詠われている。東京生まれで、都会生活を愛した吉井勇ならではの粋な歌風である。
- ・本文は、『吉井勇全集 第1巻 歌集1』（番町書房 1963年（昭和38）10月）に依る。
- ・歌集『酒ほがひ』（昴発行所 1910年（明治43）9月）は、1905年（明治38）から1910年（明治43）までの作品を集めたもの。酒と女性とを中心とした青春の欲情を平明でしかも豪宕な調べによって直情的に歌い上げている。
- ・歌集『昨日まで』（靑山書店 1913年（大正2年）5月）は、1910年（明治43）前後から1913年（大正2年）前期までの作品を集めたもの。酒と女性の歌は少なく、むしろ歓楽の後の悲しみをうたっているものが多い。酒と女に生きた青春の放埒に対する悔恨のころと新生を希求する思いを訴えている。

- ・歌集『仇情』（通一舎 1916年（大正5）4月）は、1913年（大正2）前後から1916年（大正5）前期までの作品を集めたもの。情痴の歌を集めている。
- ・歌集『東京紅燈集』（新潮社 1916年（大正5）5月）は、東京の紅燈狭斜の巷とそこに生きる女性たちを題材にしたものを集めたもの。

### 「酔狂録 序」（『生い立ちの記』） 吉井勇

またしても恋物語である。しかしその物語の主人公は私ではない。

それはもう今から七八年前の或る冬の夜のことであった。私はその時分毎晩のやうに銀座界隈の酒場歩きをやつてゐたので、その夜ももうかなり遅く、尾張町の角のところにある、或る大きな、天井に近い高い壁から時時造りものの獅子が首を出して吼える仕掛けになつてゐるカフェーで、頻にウキスキーの杯を傾けてゐた。

私もその晩かなり酔つてゐたがその酒場に集まつてゐる人達は一人として酔つてゐないものはなかつた。酒の匂ひや莫の煙がむつと噓せかへる位立ちこめてゐて、コップの落ちて壊れる音やナイフやフオークの触れ合ふ響きが、酒に荒んだ人の心を、いやが上にも苛苛させるやうに聴こえて来た。家の中は暖炉が熾に燃えてゐるので、むしろ顔が火照る位熱かつたが、外は曇まじりの雨が振り頻つてゐるので、入口の硝子扉が開く度毎に、冷たい湿つた風が用捨なく吹き込んで来て、折角帰り懸けてゐる人の足を留めた。私も幾度か帰らうとしては、外の寒さを思ふと何となく逡巡はれて、また新しい杯を命じないではゐられないのだつた。

この物語はこの夜図らずもこの酒場で出会つた或る青年——それが彫刻家であると云ふことは話を聴いてゐるうちに分つた——から聴いた話である。彼と私とは唯顔を知り合つてゐると云ふ位の交際しかなかつたのだが、その晩はひどく懐かしさうに私の傍に近寄つて来て、「是非あなたに聴いて貰ひたい話があるんです。どうぞ今夜は僕の話をして聴いてやつて下さい。」と云つてから、ウキスキーの壺を自分の前に持つて来させて、それを立てつづけに呻りながら話し始めた。

みづからの胸の傷みを癒さむと飲む酒なればとがめたまふな  
酔へばいつか夢まぼろしの國に来ぬこの國をかしながく住ままし  
われ往かむかの獅子窟は酒ありて女もありて夢見るによし  
窓の外の大音を聴きながらきけばかなしき戀がたりかな  
洛陽の酒徒にまじりて或夜半は酔も身に染む戀がたり聴く

### 【鑑賞】

- ・「酔狂録」は、歌物語集『生い立ちの記』（不二書房 1928年（昭和3））に収められている歌物語。散文によって物語が進行するが、その途中途中で、数首の短歌が挿入される。「酔狂録」は、若者の悲恋物語を、「私」が銀座のカフェーで聞くという物語で、上記の引用箇所は、その冒頭部分。

- ・本文は、『吉井勇全集 第4巻 歌物語』（番町書房 1963年（昭和38）11月）に依る。
- ・散文のあとの5首のうち、前の3首は、「青年」の思いを詠ったもの。後の2首は「私」の詠った歌となっている。いずれも、酒と女性をテーマにした耽美頹唐な歌である。散文を、短歌の説明文として短歌の前に付ける文学形式は、平安時代初期の『伊勢物語』など、古来から日本にはあり、その形式を継いでいるものである。
- ・この歌物語は、次のようなものである。「私」は、今から7、8年前の冬、銀座のカフェーで、彫刻家の若者から悲恋物語を聞いた。その若者は、先輩に連れられて行った大川端の料亭で、若い芸妓に会う。寂しい顔立ちの女性で、その日は何もなく分かれたが、若者は、秋の展覧会のためモデルが必要となり、その女性のことを思い出し、先輩を通してモデルになってくれるように頼む。その女性はモデルになることを快諾してくれ、若者は彼女をモデルに彫刻を制作する。彼女と会ううち、彼女の哀れな身の上話を聞くようになり、彼女に同情をし、やがて2人は恋に落ちる。彼女は私生児で、やはり芸妓であった母親に辛い思いをさせられたのであった。彫刻作品も完成し、その評判もよく、2人はつきあいを続けるが、彼女が病気になり入院をする。手紙のやりとりをするが、青年は彫刻制作で忙しく、彼女に会えない日が1ヶ月ほど続いた日、彼女の死亡通知が青年のものに届く。青年は、悲しみのため、完成間近であった彫刻も完成させられず、酒に溺れる日が続く。
- ・ここに引用した部分は、この若い彫刻家が、上記のような悲恋の物語を「私」に話し始める部分である。この場所が「尾張町の角」の「カフェー」とあることから、モデルは「カフェー・ライオン」であることが分かる。「カフェー・ライオン」は、1911年（明治44）、尾張町交差点の角（東京都中央区銀座5丁目）に開業したカフェー。3階建の建物で、1階が酒場、2階が大食堂、3階が余興場であった。築地精養軒の経営で、カフェーといっても料理、酒が中心で、規模が大きく一般客にも入りやすい店であった。女性給仕が和服にエプロン姿でサービスすることで知られ、また、ビールが一定量売れるとライオン像が吠える仕掛けになっていた。関東大震災で焼失した後、営業を再開した。この物語が展開されたのは、「それはもう今から七八年前の或る冬の夜のことであった。」とあることから、1920年（大正9）前後で、関東大震災前のこととなる。この物語は、無論フィクションであるが、関東大震災前、銀座のカフェーで起こってもおかしくはない物語として書かれており、当時の銀座の様子的一端がうかがえる作品である。

#### ④堀口大学

堀口大学（1892年（明治25）～1981年（昭和56））は、東京市本郷区森川町に生まれた。父親が当時、東京帝国大学法科学士で、赤門前に住んでいたことから「大学」と命名された。母親は大学が3歳の時死去する。後、父親が外交官試験に合格し、朝鮮赴任についたことから、父親の生家の新潟県長岡市で育つ。中学卒業後、上京し、「スバル」で読んだ吉井勇の短歌に魅せられ新詩社に入り、佐藤春夫らと親交を結ぶ。慶應義塾文科予科に入学するが、父の任地メキシコに呼ばれ、慶應大学を退学する。19歳から33歳にかけて、父の任地、ベルギー・スペイン・ブラジル・ルーマニアなどで暮らす。父親がベルギーの女性と再婚したため、フランス語の修得に励む。1925年（大正14）、父の外交官引退と共に帰

国し、以降、東京に住む。

ブラジルにいた1919年（大正8）1月に第1詩集『月光とピエロ』（靱山書店）を出し、1925年（大正14）9月には近現代のフランス詩を翻訳した訳詩集『月下の一群』（第一書房）で、日本の詩壇、文壇に新風を吹き込む。これは、上田敏の『海潮音』、永井荷風の『珊瑚集』と並ぶ「日本三大訳詩集」と言われている。フランス文学の影響を受けた大学の詩には、知性・機知・諧謔・エロティスムといった要素が強く現れている。

「えどはくカルチャー」では、『月下の一群』から、「夏の日のかなまけもの」を紹介した。

## 夏の日のかなまけもの 堀口大学

銀座四丁目尾張町  
角のカフェはライオン  
そこの二階で真昼間  
コニヤツクの酒杯前に  
ぼんやりとなまけものは  
もて餘した白い時間の  
消えゆくを見送りて居り。

千九百十三年夏七月十九日  
屋外は午後二時の日ざかりに、  
巡査の剣は輝き、  
撒水車行き、電車馳す！  
かかる時  
なまけものはぼんやり  
目をつぶり、耳をふさぎて、  
王侯も立ん坊と同じく享くる  
二十四時の愚劣を思ひ、  
かつて如何なる世の時計も示さざりし  
怪しき世の時を夢みて居り。

### 【鑑賞】

- ・『月光とピエロ』（靱山書店 1919年（大正8）1月）所収。
- ・本文は、『堀口大学全集 1』（小澤書店 1982年（昭和57）1月）に依る。
- ・銀座のカフェ・ライオンの2階で、夏の真昼時、コニヤックを飲みながら、人間が皆受ける時間という束縛を超越する至福を感じるという詩。酒を飲みながら、「巡査の剣」、「撒水車」、「電車」とい

う世俗的なものを超越し、何もしない時間を至高の時と認めるという「なまけもの」の哲学は逆説的である。

- ・カフェー・ライオンは、先の吉井勇の歌物語「酔狂録」にも登場したカフェー。現在の銀座4丁目交差点にあった。
- ・1913年（大正2）4月、大学は父に従いメキシコから帰国し、大久保百人町に住み、8月には再び新任地スペインに行く父に従って日本を發った。作品中に出てくる年月日「千九百十三年夏七月十九日」は、大学のこの現実生活に当てはめれば、短期の帰国期間に書かれたことになる。大学は、1年半のメキシコ滞在から久しぶりに帰国した際、銀座で過し、その時の経験を基にこの作品を書いたと考えられる。この詩のような時間の過ごし方は、昼休みをたっぷりとする、西欧の過ごし方とも通じ、銀座はそのような西欧的な時間の過ごし方を許すような場所であったのである。

### ⑤萩原朔太郎

萩原朔太郎については、「萩原朔太郎の詩」の章ですでに述べた<sup>3)</sup>。萩原朔太郎は、1886年（明治19）に群馬県前橋市に生まれ、1925年（大正14）2月、38歳の時に東京での生活を始め、大井町・田端文士村・馬込文士村などに住み、最終的に世田谷区に自宅を建て、1942年（昭和17）、55歳で亡くなった。前橋にいた時代から東京への憧れは強く、東京を舞台とした詩を数多く書いた。

「エドはくカルチャー」では、関東大震災後の銀座の松坂屋デパートを書いた「虎」を紹介した。

#### 虎 萩原朔太郎

虎なり

曠茫として巨象の如く

百貨店上屋階の檻に眠れど

汝はもと機械に非ず

牙齒もて肉を食ひ裂くとも

いかんぞ人間の物理を知らむ。

見よ 穹窿に煤煙ながれ

工場區街の屋根屋根より

悲しき汽笛は響き渡る。

虎なり

虎なり

午後なり

ばるうむ  
廣告風船は高く揚りて

薄暮に迫る都會の空

高層建築の上に遠く坐りて  
汝は旗の如くに飢ゑたるかな。  
杳として眺望すれば  
街路を這ひ行く蛆蟲ども  
生きたる食餌を暗鬱にせり。

虎なり  
えれべえたあ  
昇降機械の往復する  
東京市中繁華の屋根に  
琥珀まだらの斑なる毛皮をきて  
曠野の如くに寂しむもの。  
虎なり！  
ああすべて汝の残像  
虚空のむなしき全景たり。

—銀座松坂屋の屋上にて—

#### 【鑑賞】

- ・初出「生理」I (1933年(昭和8)6月)。『氷島』(第一書房 1934年(昭和9)6月)所収。初出の時の題名は「屋上の虎」。
- ・本文は、『萩原朔太郎全集 第2巻』(筑摩書房 1976年(昭和51)3月)に依る。
- ・関東大震災後に銀座に進出したデパート銀座松坂屋の屋上に、人寄せのために飼われていた虎を描いた詩。獰猛な野生動物である虎を、人工的な繁華街、銀座の真ん中で飼い、客寄せをしようという商業主義への批判と、それに利用されている虎への共感が述べられる。その背景に、「広告風船」、「高層建築」、「昇降機会」など、時代の最先端を行く銀座の風物が描かれるが、「銀ブラ」をして楽しむ大衆を、「街路を這ひ行く蛆蟲ども」と、否定的に表現し、銀座を複雑な相のもとにとらえている。
- ・銀座は、関東大震災後、百貨店の街となっていく。明治時代には、勧工場かんこうばという百貨販売店(1つの建物の中に、いろいろな品物を売る人が店を出す)ができ、銀座では帝国博品館など7軒あった。そして、関東大震災後には多くの百貨店が銀座に進出する。最初に松坂屋が、1924年(大正13)に銀座に進出し、全館土足入場を銀座で初めて実施し、大衆化を進めた。その後、松屋(1925年(大正14))、三越(1930年(昭和5))も銀座に出店した。
- ・百貨店は、店舗全体の売り上げ増加をねらい、当初から屋上など上階の施設を充実させ、上から下への客の流れをつくり、「ついで買い」を誘導する販売方法をとった。明治時代後期から、三越や松屋、大丸などが、屋上庭園や屋上遊覧所、ローラースケート場や音楽堂を屋上に設置した。銀座松坂屋はこの詩にもあるように、1925年(大正14)5月に屋上動物園を開設し、虎やライオン、ヒョウなどを飼育した。その様子は「夜の銀座に獅子の声」などと新聞に書きたてられ、宣伝効果を上げた。



⑥ 釈 迢 空<sup>しゃくちょうくう</sup>

釈迢空（1887年（明治20）～1953年（昭和28））は、詩人・歌人（筆名：釈迢空）であり、民俗学者・国文学者・国語学者（筆名：折口信夫<sup>おりぐちしのぶ</sup>）でもある。大阪府西成郡木津村（現：大阪市浪速区）に生まれる。1905年（明治38）國學院大學に進み、上京する。卒業後、大阪に帰るが、1914年（大正3）、再度上京し、以降、國學院大學、慶應義塾大学で国文学史、日本芸能史などを教える。民俗調査によって日本の古典を解き明かすという独創的な「折口学」を打ち出し、国文学研究の世界に新風を吹き込んだ。

短歌には少年期から親しみ、若くして『万葉集』を読破していた。國學院大学在学中から「根岸短歌会」の歌人を知り、また、1917年（大正6）には、「アララギ」同人となったが、次第に人間の孤独をうたいあげる独自の歌風を開いていった。歌集に『海やまのあひだ』（改造社 1925年（大正14）5月）などがある。

詩集には、『古代感愛集』（角川書店 1952年（昭和27）5月）、『近代悲傷集』（角川書店 1952年（昭和27）5月）、『現代檻樓集』（中央公論社 1956年（昭和31））があり、日本古代の語彙と発想によりながら、近代人の孤独な悲しみを打ち出した異色の詩を書いた。

また、小説には、当麻寺の中将姫伝説に取材した『死者の書』（青磁社 1943年（昭和18）8月）がある。「えどはくカルチャー」では、敗戦直後の銀座を描いた「繁華の幻」を紹介した。

繁華の幻 釈迢空

道のべの焼け原土に  
顯<sup>タ</sup>つ影は、夏のまぼろしー  
椽<sup>トチ</sup> とねりこ まろにえの  
竝み木のほど 行き還りつ、  
清かりし 銀座のおとめー  
ことシへく 死にや ほろびし。

綿ほこり うずまく 電車ー  
藁くずのまひ立つ ちまたー  
と行けども かく歸れども  
ひた侘し。舗道の罅<sup>ヒツリ</sup>裂  
今日もまた 何すとか  
人みちて 壓しつゝうつる

ふたゝびは 銀座をも見じ。  
晝霞 とほく霞みて、  
伊皿子も 高輪も見ゆ。

あまりにも のどかに晴れて  
かなしきは 空の青色一。

た、かひの過ぎし記憶は、  
夢と思はむ

### 【鑑賞】

- ・ 初出「四季」第5号 (1947年 (昭和22) 12月)。『近代悲傷集』 (角川書店 1952年 (昭和27) 5月) 所収。
- ・ 本文は、『折口信夫全集 第23巻』 (中央公論社 1956年 (昭和31) 1月) に依る。
- ・ 空襲で焼け野原になった銀座からは、伊皿子や高輪方面も見渡せる。そのような銀座にかつての乙女の幻を思いおこす。敗戦直後の呆然とした心境を、変わり果てた街となった銀座を舞台に吐露した詩。銀座という東京、日本の中心地のひとつが廃墟となったことで、敗戦が強調されている。
- ・ 『近代悲傷集』は、養子の藤井春洋 (1907 ~ 1945) が硫黄島で戦死した深い悲しみを込めた詩集。釋迢空は、「詩歴一通 一私の詩作について」 (『現代詩講座』 第2巻 (創元社 1950年 (昭和25) 5月)) で、次のように述べている。「もし不幸な第二世界戦争が起こらなかったら、それに、私の子どもを参加させなかったら、六十歳になんなんとした晩年を、もう詩などに心を入れる事なく過ごしてしまったであろう。」
- ・ 戦前、戦局の悪化に伴い、国民の商業活動が制限され、奢侈も禁止されるようになり、繁華街の銀座は大打撃を受けた。銀座の大通りでは、軍隊の行進が行われ、贅沢を諫める運動も街頭で行われ、戦時色が強く表れた。そのような中、1945年 (昭和20) 1月27日、銀座は初めての空襲を受けた。その後も3月10日を始め、数度の空襲を受け、壊滅的な被害を被った。敗戦後は、服部時計店などが連合国軍のPX (進駐軍のみを対象とした日用品や嗜好品を安価で販売する店) として接收され、有楽町にはパンパンと言われる私娼も現われ、田村泰次郎が、1947年 (昭和22) に発表した『肉体の門』で描いた。このように銀座は、戦前、戦中、敗戦後と、日本の戦時の歴史を象徴する場所であったのである。

### おわりに

第8回目の講座では、銀座を描いた6人の詩人の詩を紹介した。銀座は、近代になり、首都東京の表玄関としての姿を急激に整え、殊に関東大震災以降は、浅草を凌ぐ東京の盛り場となっていった。多くの人達は、銀座で最先端の文明や文化を享受し、そこに喜びや悲しみの物語が展開された。詩人たちは、それらの人々の悲喜こもごもの心情に寄り添い、作品を書いていった。それらの詩によって、銀座はいつそう陰影を持ち、魅力的な場所になっているとすることができる。

## 5. 新宿をうたった詩

### はじめに

第9回目の講座では、繁華街の新宿を描いた詩をとりあげた。

江戸時代、五街道の一つ、甲州道中の宿駅として内藤新宿が設けられたのが「新宿」の始まりで、以降、宿場町として発展した。明治時代になると鉄道の新宿駅が開業し、大正時代には都心部と郊外をつなぐ国電・市電・私鉄のターミナル駅として交通上の重要地点となった。関東大震災では都心部に比べ被害が少なく、郊外の人口急増に伴いターミナル駅としての機能を強め、また、浅草や銀座などの繁華街が多く被害を受けたこともあり、百貨店も多く進出し、新しい繁華街として発展した。戦争による空襲では大きな被害を受けたが、新宿駅周辺にはヤミ市がたちならび、やがて戦前以上の賑わいを見せるようになった。1960年代には若者によるアングラ文化も栄え、1970年代には新宿副都心計画により、超高層ビルが建ち並ぶようになり、新宿は、文化・経済の中心地の一つとして東京を代表する地域となった。

「エドはくカルチャー」では、繁華街の新宿を、詩人たちがどのように詩に描いたのかを紹介した。とりあげたのは、高村光太郎、西条八十、サトウ・ハチロー、黒田三郎、関根弘の5人の詩人、昭和時代に書かれた5作品である。

なお、エドはくカルチャーでは、詩人、田村隆一（1923年（大正12）～1998年（平成10））が、新宿の闇市の様子を書いた随筆「ハモニカ居酒屋」（『自伝からはじまる70章 大切なことはすべて酒場から学んだ』思潮社 2005年（平成17）1月）、そして、「詩の東京」第6回目の「現代詩がとらえた東京の姿」でとりあげた黒田三郎の詩「九月の風」も紹介したが、ここでは割愛する。

### （1）新宿の歴史

#### ①江戸時代

徳川家康は、1590年（天正18）、江戸に入府し、重臣の内藤清成に現在の新宿御苑一帯を屋敷地として与えた。その後、五街道制が整備され、その一つである甲州道中は、日本橋から最初の宿場高井戸までの距離が長かったため、1698年（元禄11）、四谷内藤宿が設けられ「内藤新宿」と呼ばれた。やがて、新宿は東海道の品川、中山道の板橋、日光街道・奥州街道の千住とあわせて四宿と呼ばれるようになり、江戸の新たな行楽地として発展した。非公認の売春宿、岡場所も繁盛し、「内藤新宿 馬糞まぐその中で あやめ咲くとは しほらしや」という狂歌にも歌われた。（「馬糞」は活発な馬の往来、「あやめ」は私娼である飯盛女を指す。）1718年（享保3年）には風紀上の理由から一時廃駅になるが、1772年（明和9年）には復活した。

#### ②近代

明治時代に入り、1885年（明治18）には日本鉄道赤羽・品川線が開通し、新宿駅が設けられた。1889年（明治22）には甲武鉄道新宿－八王子間が開通し、1903年（明治36）からは東京市電が新宿から各所に伸びた。そして、1913年（大正2）には京王電鉄軌道新宿追分－八王子間の開通があり、新宿は東京西郊と

都心を結ぶ交通の要衝としての地位を確立していった。また、1899年（明治32）には淀橋浄水場が新設され、東京市民の飲料水源として重要な役割を果たした。淀橋浄水場は、1965年（昭和40）の新宿副都心計画により東村山市に移転するまでその機能を果たすことになる。1909年（明治42）には、パンなどの食品店、中村屋が新宿に移転してきた。中村屋には多くの文化人が集まり、「中村屋サロン」と呼ばれるサロンが展開された。1919年（大正8）には、武蔵野映画館が開館し、以降、新宿は映画館街としても発展してゆく。

1923年（大正12）の関東大震災では、新宿地域の被害は都心部に比べ少なく、罹災者の受け入れ地域ともなり、人口が増加していった。浅草や銀座などの繁華街が、関東大震災により多くの被害を受けたこともあり、新宿は、新しい繁華街として発展する。1927年（昭和2）には小田急線が新宿－小田原間に開通し、郊外の人口急増に伴ってターミナル駅としての機能を強めていった。1926年（大正15）、布袋屋百貨店が開業（のち伊勢丹に吸収合併される）、1930年（昭和5）には、現在の株式会社スタジオアルタ（新宿区新宿3丁目）の場所にあった三越百貨店が、MI新宿ビル本館（現、ビックロ）（新宿区新宿3丁目）の場所に移転、1933年（昭和8）には伊勢丹が開店するなど、新宿には多くの百貨店が集まってきた。さらに、1927年（昭和2）には紀伊國屋書店が開業し、文芸・芸術雑誌を出版し、多くの文化人・作家を輩出した。1931年（昭和6）には小劇場ムーラン・ルージュが開場し、学生やインテリの支持を受けた。このように震災後は、新宿は新興のモダンな盛り場として栄えていった。

敗戦直後、「光は新宿より」というスローガンと共に新宿駅周辺にヤミ市ができ、戦後復興をとげ、戦前以上の賑わいを見せるようになった。1950年（昭和25）には、現在の歌舞伎町の地域で、東京産業文化平和博覧会が開催され、その跡地が劇場などになり、歌舞伎町の基礎が築かれた。1952年（昭和27）には西武新宿線が高田馬場から新宿まで延長され、1959年（昭和34）には地下鉄丸ノ内線が開通した。1960年代に入ると、1960年安保反対運動の機運を受け、新宿ではアングラ文化が栄え、ジャズ喫茶・歌声喫茶などの喫茶店に多くの若者が集まり、サブカルチャーの発信地となった。

高度経済成長期には、東京都心部の機能麻痺、交通渋滞の悪化などにより、新宿を副都心とする計画が具体化し、1965年（昭和40）までに機能を停止した淀橋浄水場の跡地に超高層ビル群が建設されていった。1971年（昭和46）の京王プラザホテルを皮切りに、1970年代から1980年代にかけて相次いで超高層ビルが建設された。こうして、新宿は文化・経済の中心地の一つとして東京を代表する地域となっていった。

## （2）新宿の詩

### ①高村光太郎

高村光太郎（1883年（明治16）～1956年（昭和31））については、「戦中戦後の詩」の章ですでに述べが<sup>1)</sup>、江戸末期から明治期に活躍した木彫家、高村光雲（1852～1934）の長男として東京市下谷区西町3丁目に生まれ、幼少期より木彫の後継者としての修練を与えられた。東京美術学校で木彫のほか塑像も学び、卒業後、アメリカそしてフランスに学んだ。オーギュスト・ロダンの彫刻作品に強い影響を受け、帰国後は外面的な写実だけでなく内側から盛り上がる量感をもった作品を制作した。また、日本への口

ダン紹介も行い、彫刻をテーマとした詩も書いている。

「エドはくカルチャー」では、新宿中村屋に深い関わりがあり、光太郎が高く評価した彫刻家、荻原<sup>おぎわら</sup>守衛<sup>もりゑ</sup>（礫山<sup>ろくざん</sup>）（1879年（明治12）～1910年（明治43））について書いた詩を紹介した。光太郎は、礫山とはロンドン滞在中に知り合い、帰朝してからは近しい関係で往来した。当時の2人は日本近代彫刻の理念の体現者・先導者の位置にあった。

### 荻原守衛 高村光太郎

単純な子供荻原守衛の世界観がそこにあつた、  
坑夫、文覺、トルソ、胸像。  
人なつこい子供荻原守衛の「かあさん」がそこに居た、  
新宿中村屋の店の奥に。

巖本善治の鞭と五一會の飴とロダンの息吹とで荻原守衛は出來た。  
彫刻家はかなしく日本で不用とされた。  
荻原守衛はにこにこしながら卑俗を無視した。  
単純な彼の彫刻が日本の底でひとり遅しく生きてゐた。

一原始、  
一還元、  
一岩石への郷愁、  
一燃える火の素朴性。

角筈の原つばのまんなかの寒いバラツク。  
ひとりぼつちの彫刻家は或る三月の夜明に見た、  
六人の侏儒が枕もとに輪をかいて踊つてゐるのを。  
荻原守衛はうとうとしながら汗をかいた。

粘土の「絶望」はいつまでも出來ない。  
「頭がわるいので礫なものは出來んよ。」  
荻原守衛はもう一度いふ、  
「寸分も身動きが出來んよ、追ひつめられたよ。」

四月の夜ふけに肺がやぶけた。  
新宿中村屋の奥の壁をまつ赤にして

萩原守衛は血の塊りを一升はいた。

彫刻家はさうして死んだ——日本の底で。

### 【鑑賞】

- ・1936年（昭和11）8月28日に制作され、「詩洋」（1936年（昭和11）10月）に発表された作品。
- ・本文は、『高村光太郎全集 第2巻』（筑摩書房 1957年（昭和32）10月）に依る。
- ・彫刻家、萩原守衛が深く新宿中村屋と関わっていたことを示し、彼が、彫刻にまだ理解浅い日本で、苦悩しみながら創作活動をしている様子を述べる。彼の才能を高く評価し、その死を悼んだ詩。
- ・中村屋は、新宿に本社をおく食品メーカー。相馬愛蔵（1870年（明治3）～1954年（昭和29））、良（黒光、1876年（明治9）～1955年（昭和30））夫妻が、1901年（明治34）東京帝国大学正門前にあったパン販売店中村屋を買い取り創業した。1909年（明治42）、新宿の現在の本店地（東京都新宿区新宿三丁目26番13号）に移転し、各種菓子や缶詰等の製造販売も始める。1927年（昭和2）には、喫茶部を開設し、カレーライスとボルシチを売り出す。明治末から大正にかけては、美術・演劇・文学に関わる様々な文化人がつどい、「中村屋サロン」とも呼ばれた。（萩原守衛（礫山）、中村彝、内村鑑三、ワシリー・エロシェンコ、中村不折、木下尚江、高村光太郎、松井須磨子、秋田雨雀などがつどった。）
- ・萩原守衛（1879年（明治12）～1910年（明治43））は、明治時代の彫刻家。長野県穂高町に生まれ、少年時代から相馬愛蔵・良夫妻の知遇を得る。画家を志し、渡米。その時高村光太郎を知る。パリに渡り、ロダンの「考える人」を見て衝撃を受け、彫刻家へ転向。帰国後、相馬夫婦の経営する新宿中村屋に出入りし、黒光の人柄を慕ってつどい芸術家たちと交遊するが、黒光への思慕に苦悩する。彫刻作品「坑夫」、「文覚」、「デスペア」、「女」などの秀作を生む。「女」は、守衛が慕う黒光そっくりであったという。中村屋で突然咯血し、死去。享年30歳。没後、郷里の長野県安曇野市穂高に礫山美術館が設立される。
- ・「<sup>つのはず</sup>角筥の原っぱのまんなかの寒いバラック」とあるが、これは、萩原守衛の兄が建ててくれたというアトリエで、中村屋のそばにあったもの。高村光太郎は、このアトリエの思い出を次のように記している。「私は日本に帰ると一週間ばかりして早速彼を新宿角筥の畠の中にある彼のアトリエに訪問した。中村屋のパン屋の店はやはり今のところにあり、そこからアトリエまで歩いて五六分の距離だったが、今日にするとどの辺にあたるのかまるで見当がつかない。（中略）アトリエはなかなか広く、バラック風で、板のすき間には丹念に新聞紙の目張りがしてあった。六畳ぐらいのたたみ敷の部屋がついていて、そこが居間というわけであった。アトリエには丁度「労働者」が粘土で出来かかって居り、布をとってそれを見せてくれた。「デスペア」（「絶望」行吉註）ももう出来ていたようだし、戸張孤雁の首もその時見たように思う。」（高村光太郎「萩原守衛—アトリエにて5—」：「新潮」1954年（昭和29）6月号）

### ②西条八十

西条八十（1892年（明治25）～1970年（昭和45））は、東京市牛込区牛込払方町に生まれた。早稲田

大学文学部英文科卒業。<sup>ひなつこうのすけ</sup>日夏耿之介らと同人誌「聖盃」（のち「仮面」と改題）を刊行。三木露風の「未来」にも参加し、象徴的な詩を作った。また、童話童謡雑誌「赤い鳥」に多くの童謡を発表し、北原白秋と並び注目を集めた。童謡詩人、金子みすゞ（1903～1930）を最初に見出したのも西条八十である。1924年（大正13）にはフランスパリのソルボンヌ大学に留学、2年後に帰国し、母校早稲田大学フランス文学科教授となる。歌謡曲の作詞家としても活躍し、「東京行進曲」、「青い山脈」、「蘇州夜曲」、「誰か故郷を想わざる」、「ゲイシャ・ワルツ」、「王将」など数多くのヒットを放った。童謡から流行歌まで、大正・昭和時代に愛唱された詩を数多く創作した。

## 東京行進曲 西条八十

昔恋しい銀座の柳  
<sup>あだ としま たれ</sup>仇な年増を誰が知る  
ジャズでをどつてリキユルで更けて  
あけりやダンサアのなみだあめ。

恋の丸ビルあの窓あたり  
<sup>ふみ</sup>泣いて文かく人もある  
ラッシュアワーに拾つたばらを  
せめてあの娘の思ひ出に。

広い東京恋故<sup>ゆゑ</sup>せまい  
いきな浅草忍び逢ひ  
あなた地下鉄私はバスよ  
恋のストツプまゝならぬ。

シネマ見ませうかお茶のみませうか  
いつそ小田急<sup>おだきふ</sup>で逃げませうか  
変る新宿あの武蔵野の  
月もデパートの屋根に出る。

（第4連の別の歌詞）

長い髪して マルクス・ボーイ  
今日も抱へる「赤い恋」  
プロの新宿あの武蔵野の  
月もデパートの屋根に出る。

## 【鑑賞】

- ・1929年（昭和4）5月に封切られた映画「東京行進曲」の主題歌。作曲を中山晋平が行い、佐藤千夜子が歌った。ビクターから発売され、25万枚を売り上げた。日本ビクター蓄音機株式会社は、1927年（昭和2）創立され、翌年にはコロムビアレコード株式会社が設立され、1929年（昭和4）当時は、レコード歌謡全盛時代の幕開けの時代であった。
- ・本文は、『西条八十全集 第8巻』（国書刊行会 1992年（平成4）11月）に依る。
- ・映画「東京行進曲」は白黒無声映画で監督は溝口健二。製作は、日活（太秦撮影所）。原作は、菊池寛（雑誌「キング」連載）。内容は、腹違い兄妹の恋愛悲喜劇を描いた通俗メロドラマで、腹違いの兄が妹に恋をするが、腹違いの兄妹であることがわかり妹を親友に譲るという物語。
- ・関東大震災から復興した東京の代表的な繁華街、銀座、丸の内、浅草、新宿のモダンな街並みを詠ったもの。関東大震災後、帝都復興事業が行われ、この映画が封切られて約10ヵ月後の1930年（昭和5）3月26日には、東京市内で帝都復興祭が行われている。
- ・第1連の銀座では、ジャズなどの新しい音楽文化が歌われ、第2連の丸の内では、丸ビルという、当時東洋一のビルと言われたオフィスビル、丸ノ内ビルディングとラッシュアワーが歌われ、第3連の浅草では、1927年（昭和2）、上野－浅草間に開通した地下鉄が歌われる。そして第4連で、繁華街として急激に変貌をとげる新宿が歌われる。
- ・第4連の新宿では、当時の新宿の新しい諸施設が紹介されている。「シネマ」は、映画館のことで、当時、新宿では武蔵野館が大きな映画館として有名であった。サイレント映画の弁士、徳川無声が名をはせた。1928年（昭和3）には、武蔵野館は、洋画専門館となり多くの観客を集めた。「お茶」という言葉で想像させるのは、中村屋喫茶部である。パン屋として開業し、1927年（昭和2）には日本初のインドカーリーを出し、喫茶部が開店した。「小田急」は、小田原急行鉄道で、1927年（昭和2）、新宿－小田原間の運転を開始し、新宿駅は西部近郊からの玄関口の役割を果たし始めている。「デパート」は、関東大震災後、新宿に多く進出しており、この作品が書かれた当時は、三越・ほてい屋・新宿松屋の3軒があった。浅草、銀座に比べ新しい繁華街の新宿の風物が、短い言葉で端的に紹介されている。新宿というと、まだ「武蔵野」の面影が濃く残る土地であったが、関東大震災後、急激に変化し、それが「かわる新宿」と歌われているのである。また、武蔵野と月は一組セットとして、和歌や日本画に、数多く表現されているが、そのことを受けて、「あの武蔵野の／月もデパートの 屋根に出る」という歌詞がつくられている<sup>2)</sup>。
- ・第4連は、当初、別の歌詞が書かれていたが、レコード会社の「官憲がうるさそうだから」という要望で書き換えられたという。元の歌詞の「マルクスボーイ」とは、当時の流行語で「エンゲルスガール」と対の言葉。マルキストを気取る青年という意味で、最新の若者の風俗でもあった。『赤い恋』は、ロシアの女性革命家アレクサンドラ・ミハイロヴナ・コロantai（1872～1952）が著わした小説。
- ・大正時代の末から昭和時代の初めにかけては、社会主義運動・労働運動の高揚に伴い、プロレタリア文学運動もおこっていたが、1930年代に入ると、きびしい取り締まりやナショナリズムの国民的が高まってきていた。



- ・この詩が書かれた昭和初期は、不況や凶作、左翼思想家の取り締まりなどがあり、出口のない暗い絶望と虚無感が広がり、社会不安が深刻化、多くの人々は刹那的享楽に走った。東京では、「エロ・グロ・ナンセンス」という言葉が流行し、享楽と不安の綾なす時代であった。西条八十自身、「東京行進曲」は不合理に膨張した経済生活の下に乱舞してゐる浮華な現代の首都人の生活のジャズの風刺詩」と述べている<sup>3)</sup>。

### ③サトウ・ハチロー

サトウ・ハチロー（1903年（明治36）～1973年（昭和48））（本名：佐藤八郎<sup>さとうはちろう</sup>）は、東京市牛込区市谷薬王寺前町（現：東京都新宿区）に生まれる。父親は、俳人・小説家の佐藤紅緑<sup>こうろく</sup>（1874～1949）。少年時代は手を焼く暴れん坊で、勘当され小笠原諸島父島の感化院行きを命じられた。実際には感化院には入らず、佐藤家に入出入りしていた詩人、福士幸次郎（1889～1946）と共同生活をし、読書の日々を送った。その後、幸次郎の紹介で西条八十に師事。1921年（大正10）以降、雑誌に童謡や童話を精力的に発表する。23歳のときには都会的感覚の抒情詩を作り、第1詩集『爪色の雨』（金星堂 1926年（大正15）5月）を出版する。昭和に入ってから、浅草でエノケンや二村定一らの軽演劇劇団「プペ・ダンサント」の文芸部主任として軽演劇の台本を書いた。また、歌謡曲の作詞も数多く手がけた。童謡では「ちいさい秋みつけた」、歌謡曲では「リンゴの唄」など、戦前から敗戦後にかけて多数の名品を残す。多方面で活躍した多彩な詩人であった。

### 新宿ムーラン・ルージュ（劇団歌） サトウ・ハチロー

赤いルージュに ひかされて  
今日もくるくる 風車  
私のあなた あなたの私  
ラムウ ラムウ ムーラン・ルージュ

一度みたらば もう一度  
残る思ひの 風車  
私のあなた あなたの私  
ラムウ ラムウ ムーラン・ルージュ

恋をしたなら 何時迄も  
永久消えない 風車  
私のあなた あなたの私  
ラムウ ラムウ ムーラン・ルージュ

胸にタップの 靴の音  
ねても消えない 風車  
私のあなた あなたの私  
ラムウ ラムウ ムーラン・ルージュ

#### 【鑑賞】

- ・1932年（昭和7）ころ作成。
- ・本文は、中野正昭『ムーラン・ルージュ新宿座－軽演劇の昭和史』（森話社 2011年（平成23）9月）に依る。
- ・新宿の大衆劇場、ムーラン・ルージュ新宿座の宣伝歌。「ラムウ」とは、フランス語で「愛」の意味。
- ・ムーラン・ルージュ新宿座は、戦前から戦後にかけて（1931年（昭和6）～1951年（昭和26））、現在の新宿3-36-36、JR新宿駅南口東側の元「新宿国際会館ビル」のあたりにあった大衆劇場。芝居とレビュー（音楽、舞踏、寸劇、曲芸など）を上演した。1933年（昭和8）から1935年（昭和10）頃が最盛期。「ムーラン・ルージュ（Moulin Rouge）」とは、フランス語で「赤い風車」という意味。フランスのパリのモンマルトルにあるキャバレーからその名をとった。ムーラン・ルージュ新宿座の入口には赤い風車が回り、当時の新宿の街の名物にもなっていた。サトウ・ハチローは、1932年（昭和7）に3ヶ月ほど、文芸部長格で在籍していた。
- ・1931年（昭和6）には、柳条湖事件が起こり、中国との武力紛争である満州事変が始まり、時代は次第に戦争へと向かっていった。市民の間では、「エロ・グロ・ナンセンス」といった言葉が流行し、享楽と不安の緩なす時代となった。そのようななかで、軽演劇が人気を博し、ムーラン・ルージュ新宿座は、特に学生や文化人に人気を博していった。雑誌「キネマ旬報」では次のように紹介している。「兎に角、気のきいた劇団である。（中略）作者の感覚、俳優の演技、背景、照明総てが小粋で小味である、総て小という字のつく感じのものである。小といった処で決して軽々しい意味ではなく、寧ろ仏蘭西人の好んで使う愛称の意味を持つMon Petitのそれである。」（「No.101.M.R.を観て」石見為雄「キネマ旬報」第526号 1934年（昭和9）12月11日）

#### ④関根弘

関根弘（1920年（大正9）～1994年（平成6））は、東京市浅草区浅草森下町（現：台東区蔵前）に生まれた。向島第二寺島小学校卒業後、すぐに就職し苦学する。少年時代からアナキズムの影響を受けて詩作をした。1939年（昭和14）、木材通信社に入社し、以降はジャーナリストとしても活動する。敗戦後は共産党に入党するが、のち離党。1958年（昭和33）全国工業新聞退社をもって記者生活を終え、以後、詩人・評論家としての文筆活動に専念する。「新日本文学」などに依り、プロレタリア系の詩誌「列島」のリーダーとして活動し、左翼詩とアヴァンギャルド芸術の統一を主張した。抒情性を排し、時代を即物的・批評的に捉えてゆこうとし、プロレタリア詩に明快さと軽快さをもたらした。

東京についての著作も多く、詩集『新宿詩集』（土曜美術社 1980年（昭和55）9月）、随筆『わが新宿！

叛逆する町』（財界展望社 1969年（昭和44）5月）、随筆『パビリオン TOKYOの町』（創樹社 1986年（昭和61）5月）などがある。

## 超高層 関根弘

窓を開けると  
六番目に建った超高層ビルが  
壁のように立っている  
その後ろにあるのが  
七番目と  
五番目  
首をつきだすと  
四番目もみえる  
珍しくもなくなって  
ほとんど意識の外の存在だが  
時には狭くなった空をみつめて  
立退いてくれないかなと  
原住民は嘆息する

新宿西口・超高層ビル街  
テレビの画面によく写る  
新聞の社会面もにぎわす  
印刷会社の社長が三人組に襲われて  
一万円奪られたとか  
オモチャのピストルをもった  
浮浪者が銀行を襲ったとか

九州から出てきた友人が  
マンハッタンみたいだなァといった  
エンパイア・ステート・ビルの半分  
五十階平均の勢揃い  
けれども周辺は一・七階平均ということだ  
その一・七階から  
超高層は肥料を吸い上げにかかっている  
六番目へ入った銀行から

預金を勧誘にきた  
また夜になると  
六番目の最上階は  
赤や青の灯でにぎやか  
無料展望台やら  
食堂街があり  
こちらの窓をさしまねいている  
天ぷらなんか食べにこないかと……

### 【鑑賞】

- ・ 初出「使者」二号（1979年（昭和54）7月）。詩集『新宿詩集』（土曜美術社 1980年（昭和55）9月）所収。
- ・ 本文は、詩集『新宿詩集』（土曜美術社 1980年（昭和55）9月）に依る。
- ・ 西新宿に林立する超高層ビルを見上げながら、西新宿の庶民が嘆息するという詩。超高層ビル群やその背後にある巨大な資本主義社会を皮肉を込めて批判する。
- ・ 1965年（昭和40）、新宿駅西側の淀橋浄水場が閉鎖され、新宿副都心の開発が始まった。1971年（昭和46）開業の京王プラザホテル本館を皮切りに、新宿住友ビルディング（竣工：1974年3月）、KDDIビル（竣工：1974年6月）、新宿三井ビルディング（竣工：1974年9月）、安田火災海上本社ビル（開業：1976年5月）、新宿野村ビルディング（竣工：1978年5月）、新宿センタービル（竣工：1979年10月）と次々と超高層ビルが林立するようになる。この作品が書かれたのは、7番目の新宿センタービルが建った後という設定である。また、「窓を開けると／六番目に建った超高層ビルが／壁のように立っている」という表現から、この住民は西新宿7丁目近辺に住んでいると思われる。このあたりは住宅地と商店が混在している地域で、「けれども周辺は一・七階平均ということだ」とあるように、木造の低い建物が蝟集し、超高層ビル群との差が如実に現われ、東京の跋行的な経済発展が典型的に現われている地域である。
- ・ 関根弘は、『新宿詩集』の「あとがき」に次のように記している。「新宿センタービルへは、わたしの家から歩いて約五分の距離であろう。その地下二階にあるビヤホールで、夕方、ときどきジョッキをかたむける習慣がついた。新宿センタービルというのは、淀橋浄水場跡地に、七番目にできた五十階建ての超高層ビルで、そのまわりをとりかこむようにして、京王プラザホテル、住友ビル、KDD、三井ビル、安田火災海上ビル、野村ビルなどが林立している。ここへくると、もう日本ではないような気がする。インベーダーに占領された町へきたような気がする。わたしは、新宿センタービルができるまでは、新宿はどこまでいっても新宿だ、戦後の闇市の亡霊を追放できるものではないと信じてきた。その良い例がターミナル・デパートだ。これは闇市の近代化、その延長形態にすぎないではないか。超高層ビルが二本、三本と建ってきて、このわたしの信念にゆるぎはなかった。それらの建造物のどこかに闇市の匂いをかぎつけて満足していた。しかし、新宿センタービルが、七九年の十一月にオープンしたとき、出かけていったわたしははじめて、これまでの新宿とは異質の新宿の出現を

みとめないわけにはいかなかった。闇市の亡霊をついに振り切っている。そして量の質への転化！  
超高層ビル群は、俄かにインベーダー、異星人の町の様相を呈するにいたったのである。」

- ・ 関根弘が、なぜ7番目の超高層ビル、新宿センタービルが闇市の亡霊を振り切っていると感じたか不明であるが、新宿センタービルが開業した1979年（昭和54）ころは、東京の中心的繁華街が、新宿から渋谷へと移行した時代であった。敗戦後の新宿は闇市から始まり、アングラ文化に象徴されるような反体制的な若者や文化人によるところがあったが、1970年代は、渋谷が明るく開放的でファッショナブルな街として若者たちの強い支持を受けてゆく。渋谷には社会的・政治的な意向は薄く、新宿も含め、街から社会性・政治性が失われていったのが、新宿センタービルが建った1979年（昭和54）ころである。社会的・政治的な感心の強い関根弘から見れば、そのころ新宿が変容したと感じられたのかもしれない。

### おわりに

第9回目の講座では、新宿を描いた詩人の詩を紹介した。東京の盛り場は、大きく見ると、浅草から銀座、そして新宿へと移り変わっていつている。新宿は、明治以降、次第に近代化されてゆき、関東大震災以降、新興の盛り場として賑わった。敗戦後は、若者を中心に、あらゆる文化を受け容れる進取の気性に富んだ、強いエネルギーを発散する街として、その特異性を発揮した。副都心開発、都庁の移転と、現在も郊外からのターミナル駅としての性格を持ちながら、商業・経済の中心地の一つとして発展している。

新宿は、主に明治時代以降、漸次発展していった新しい町であるが、詩人たちは、その様相を詩に残し、新宿の歴史を私たちに伝えてくれている。

### おわりに

以上が、「エドはくカルチャー」で行った連続講座「詩の東京」（全9回）のうち、第5回から第9回までの概要である。

第5回から第6回までは、戦争中から現代までの、東京を描いた詩を紹介した。戦争は、生活・経済・文化などすべての面で、国民を巻き込み、詩人たちもまた、軍国主義の体制に抵抗できず、戦時体制を称揚し、戦意を高揚する作品を書いた。そのような作品を今から読むと強い衝撃を受けるが、それが戦争であったことが如実にわかる。敗戦後の詩は、その反省の上に立って、思想面を含む表現面での模索が行われ、「荒地」などのグループが出現した。現在の日本の詩は、この模索の上にたっているといえる。そして、これら戦争中から敗戦後にかけての詩の大きな舞台が、首都である東京であった。政治の中心であり、多くの詩人たちが集まる東京は、詩の生まれる大きな中心地であることは、明治時代以降の日本の特徴である。やがて、敗戦の混乱が落ち着き、高度経済成長期に入るにつれて、詩人は、東京の市井の人々の生活に目を向ける。それは、戦争時、国家によって混乱させられた、人間の日常生活の喜怒哀楽を取り戻すかのようなようでもある。国家の首都という面ではなく、一人一人の生活が展開されている東

京の姿を、詩人たちは私たちに示してくれている。これらの作品は、東京が人々の生活によって成り立っていることを改めて感じさせてくれ、東京への愛着を深くしてくれるものでもある。

第7回から第9回は、描かれた場所別に、東京を描いた詩を紹介した。浅草・銀座・新宿を描いた詩を紹介したが、それらは、東京の盛り場として栄えた街であり、時代的には、この順番で繁栄していった。都市には、人々を日常生活から解放し、新たな刺激を与えてくれる場所としての盛り場がある。娯楽の場所であると同時に、文化の場所であり、常に多くの人々が寄り集まり栄えている盛り場は、大都市ならではの場所であるといつてよい。その盛り場は、時代に沿って、それぞれの特徴を持ってあらわれる。詩人たちは、それらの特徴を詩という作品にあらわし、また、逆に、詩人たちに詠われることで、盛り場もその性質を強くしていったということもできる。盛り場の詩は、東京という大都市ならではの詩である。それらを読むことで、われわれは、盛り場の雰囲気を追体験できると同時に、その盛り場の性質を把握することができる。

東京を描いた詩を、「えどはくカルチャー」という講座で紹介したが、紹介できた作品は、数にしてわずかである。内容的にも、時代や作品の性質を網羅しているわけではない。「えどはくカルチャー」では、比較的短く、また、理解しやすい作品を選んだが、私の個人的な恣意性も反映されているであろう。東京を描いた詩を網羅したデータベースの必要性は、この報告書を書く中で強く思われた。データベースを作ることで、東京を描いた詩の全容が姿を現し、そこから改めて詩で描かれた東京の姿が現れるであろう。

また、詩という文学作品は、事実を客観的に伝えるためのものではなく、言語によって、事象や感情、思想などを美的に表現する芸術作品である。詩に描かれた東京の姿は、したがって、歴史的な事実では決してなく、あくまで、詩人によって描かれた、虚構の言語美の一姿に過ぎない。この「えどはくカルチャー」では、そのようなことを認めつつ、詩を書かれた東京の地名と密接に関連付けて読むという方法をとった。詩を歴史や地理の面から鑑賞し、その土地の性格を、詩人の主観を通してみていった。このような詩の読み方は、文学作品を読む読み方として十分かどうか。言語による芸術作品としての詩の読み方として誤りはないか、という疑問が常に付きまとった。このあたりの疑念を解くことは、私のこれからの課題である。

最後に、つたないながら、私のこれらの講座を聞いてくださった受講者の方々に厚くお礼を申し上げる。また、退職後もこのような報告書を紀要に載せてくださった東京都江戸東京博物館都市歴史研究室の関係者の方々に心よりお礼を申し上げる。

## 【註】

### 1. 戦中・戦後の詩にみる東京

- 1) 翼賛運動史刊行会『翼賛国民運動史』1954
- 2) 北河賢三編『資料集 総力戦と文化 第1巻 大政翼賛会文化部と翼賛文化運動』大月書店 2000
- 3) 伊藤信吉『室生犀星 戦争の詩人・避戦の作家』集英社 2003
- 4) 坪井秀人『声の祝祭 日本近代詩と戦争』（名古屋大学出版会 1997）によると、1929年（昭和4）4月29日、JOBKが「詩の夕」という番組を放送した。（富田碎花の講演、照井澗三や外国人計10人による朗読・朗詠・詠誦）

- 5) 坪井秀人『声の祝祭 日本近代詩と戦争』名古屋大学出版会 1997
  - 6) 櫻本富雄『日本文学報国会 大東亜戦争下の文学者たち』青木書店 1995
  - 7) 坪井秀人『声の祝祭 日本近代詩と戦争』名古屋大学出版会 1997
3. 浅草をうたった詩
- 1), 3) 「東京を描いた詩について エドはくカルチャー「詩の東京（全9回）」実施報告（第1回から第4回）」参照。（「東京都江戸東京博物館紀要 第6号」2016）
  - 2) 『横山源之助全集 第1巻』社会思想社 2001
  - 4) 『金子光晴全集 第15巻』中央公論社 1977
4. 銀座をうたった詩
- 1), 2), 3) 「東京を描いた詩について エドはくカルチャー「詩の東京（全9回）」実施報告（第1回から第4回）」参照。（「東京都江戸東京博物館紀要 第6号」2016）
5. 新宿をうたった詩
- 1) 「東京を描いた詩について エドはくカルチャー「詩の東京（全9回）」実施報告（第1回から第4回）」参照。（「東京都江戸東京博物館紀要 第6号」2016）
  - 2) 「武蔵野」は『万葉集』、『伊勢物語』、『更級日記』などにも、その名が現われ、『続古今和歌集』には「武蔵野は月の入るべき峯もなし、尾花が末にかかる白雲」（源通方）と詠われ、俗謡にも「武蔵野は月の入るべき山もなし、草より出でて草にこそ入れ」とあるように、月と1セットになって、見渡すかぎりの草むらが広がる広い関東平野というイメージが作られていた。その様子を描いた屏風も多くあり、東京都江戸東京博物館にも「武蔵野図屏風」（江戸時代中期）がある。
  - 3) 『西条八十全集 第8巻』（国書刊行会 1992年（平成4）11月）の「解題・解説」によると、音楽評論家、伊庭孝<sup>いばなかし</sup>（1887～1937）は、「東京行進曲」がヒットした1929年（昭和4）、読売新聞で「軟弱・悪趣味の現代民謡」と題して「東京行進曲」を悪趣味と批判した。西条八十は、それに対して、「伊庭孝氏に与ふー「東京行進曲」と僕ー」を書き、「民謡の生命は大衆が口にするところに存する。僕の東京行進曲が流行しそれが癪にさはるならそれを好んでうたう大衆を責めるがいい。（中略）芸術は人生の再現だ。見るところを活写しただけの「東京行進曲」のどこが悪いのだらうか？」などと反論した。

## 【主要参考文献】

### 1. 詩の東京5 戦中・戦後の詩にみる東京

- ・『室生犀星全集』（全12巻別巻2巻）新潮社 1964-1968
- ・『高村光太郎全集』（全18巻別巻1巻）筑摩書房 1957-1959
- ・『金子光晴全集』（全15巻）中央公論社 1975-1977
- ・『鮎川信夫全集』（全8巻）思潮社 1989-2001
- ・『中桐雅夫全詩』思潮社 1990
- ・『北村太郎の仕事』（全3巻）思潮社 1990-1991
- ・翼賛運動史刊行会『翼賛国民運動史』1954
- ・坪井秀人『声の祝祭 日本近代詩と戦争』名古屋大学出版会 1997
- ・櫻本富雄『日本文学報国会 大東亜戦争下の文学者たち』青木書店 1995
- ・北河賢三編『資料集 総力戦と文化 第1巻 大政翼賛会文化部と翼賛文化運動』大月書店 2000

### 2. 詩の東京6 現代詩がとらえた東京の姿

- ・『黒田三郎著作集』（全3巻）思潮社 1989-1989
- ・『第4回萩原朔太郎賞受賞者展覧会辻征夫展図録』萩原朔太郎記念水と緑と詩のまち前橋文学館

1997

3. 詩の東京7 浅草をうたった詩

- ・『白秋全集』(全39巻別巻1巻) 岩波書店 1984-1988
- ・『啄木全集』(全8巻) 筑摩書房 1978-1980
- ・『室生犀星全集』(全12巻別巻2巻) 新潮社 1964-1968
- ・『金子光晴全集』(全15巻) 中央公論社 1975-1977
- ・堀切直人『浅草』(江戸明治篇、大正篇、戦後篇) 右文書院 2005
- ・葉山修平監修『室生犀星事典』 鼎書房 2008

4. 詩の東京8 銀座をうたった詩

- ・『白秋全集』(全39巻別巻1巻) 岩波書店 1984-1988
- ・『啄木全集』(全8巻) 筑摩書房 1978-1980
- ・『石川啄木事典』おうふう 国際啄木学会 2001
- ・『吉井勇全集』(全8巻) 番町書房 1963-1964
- ・『堀口大学全集』(全9巻補巻3巻別巻1巻) 小沢書店 1981-1988
- ・『萩原朔太郎全集』(全15巻補巻1巻) 筑摩書房 1975-1978
- ・『折口信夫全集』(全31巻別巻1巻) 中央公論社 1965-1968
- ・武田勝彦、田中康子『銀座と文士たち』 明治書院 1991
- ・『朝日新聞社史 明治編』 朝日新聞社 1990
- ・『朝日新聞社史 資料編 明治12年(1879年)～昭和64年(1989年)』 朝日新聞社 1995

5. 詩の東京9 新宿をうたった詩

- ・『高村光太郎全集』(全18巻別巻1巻) 筑摩書房 1957-1959
- ・『西条八十全集』(全17巻別巻1巻) 国書刊行会 1991
- ・中野正昭『ムーラン・ルージュ新宿座－軽演劇の昭和小史』 森話社 2011

6. 日本近現代詩史

- ・浅井清〔ほか〕編『新研究資料 現代日本文学 第7巻 詩』 明治書院 2000
- ・正津勉編、鮎川信夫解説『東京詩集1 Tokyo 1860～1923』 作品社 1987
- ・正津勉編、北村太郎解説『東京詩集2 Tokyo 1923～1945』 作品社 1987
- ・正津勉編、吉本隆明解説『東京詩集3 Tokyo 1945～1986』 作品社 1986
- ・清岡智比古『東京詩 藤村から宇多田まで』 左右社 2009
- ・日本近代文学館編『日本近代文学大事典』(全6巻) 講談社 1977-1978
- ・原子朗編「別冊國文學・NO.35 近代詩現代詩必携」 學燈社 1988
- ・伊藤信吉〔ほか〕編『現代詩鑑賞講座』(全12巻) 角川書店 1968-1969
- ・名著復刻全集編集委員会編『新選 名著復刻全集 近代文学館－作品解題』 日本近代文学館1970
- ・名著復刻全集編集委員会編『特選 名著復刻全集 近代文学館－作品解題』 日本近代文学館1971
- ・名著復刻全集編集委員会編『精選 名著復刻全集 近代文学館－作品解題』 日本近代文学館1972



- ・『日本の詩歌』（全30巻別巻1巻）中央公論社 1967-1974（1971？）
- ・『現代の詩人』（全12巻）中央公論社 1983-1984

7. 東京

- ・石塚裕通、成田龍一『東京都の百年』山川出版社 1986
- ・宮地正人『日本通史Ⅲ 近現代 国際政治下の近代日本』山川出版社 1987
- ・吉見俊哉『都市のドラマトゥルギー』弘文堂 1987

「えどはくカルチャー」 詩の東京 (第5回～第9回) 詩一覽

草	詩人	詩	制作年	初出誌	初出年	詩集	詩集発行年
戦中戦後の詩にみる東京	室生犀星	臣らの歌	-	-	-	『筑紫日記』	1942年(昭和17)6月
	白鳥省吾	大砲は生きてる	-	-	-	『辻詩集』	1943年(昭和18)10月
	壺井繁治	鐵瓶に寄せる歌	-	-	-	『辻詩集』	1943年(昭和18)10月
	西川林之助	辻詩	-	-	-	『辻詩集』	1943年(昭和18)10月
	高村光太郎	必死の時	1941年(昭和16)11月19日	婦人公論	1942年(昭和17)1月	『大いなる日に』	1942年(昭和17)4月
	高村光太郎	わが詩をよみて人死に就けり (暗愚小傳断片)	[1946年(昭和21)5月11日]	-	-	-	-
	金子光晴	赤身の詩 - 東京の廢墟に	-	-	-	『非情』	1955年(昭和30)11月
	中桐雅夫	一九四五年秋II	-	-	-	『中桐雅夫詩集』	1964年(昭和39)12月
	鮎川信夫	白痴	1947年(昭和22)冬	荒地	1947年(昭和22)1月	『鮎川信夫詩集』	1955年(昭和30)2月
	北村太郎	センチメンタル・ジャーニー	1948年(昭和23)ころ	詩学	1949年(昭和24)6月	『北村太郎詩集』	1966年(昭和41)11月
現代詩がとらえた東京の姿	黒田三郎	九月の風	-	-	-	『ちいさなユリと』	1960年(昭和35)5月
	石垣りん	女湯	-	-	-	『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』	1959年(昭和34)12月
	辻征夫	向島金美館	-	詩と思想	1983年(昭和58)10月	『かぜのひきかた』	1987年(昭和62)5月
	アーサー・ピナード	ぼくらの庭	-	-	-	『釣り上げては』	2000年(平成12)7月
浅草をうたった詩	北原白秋	足くび	-	スバル	1911年(明治44)2月	『思ひ出』	1911年(明治44)6月
	北原白秋	燒栗のにほひ	-	方寸	1909年(明治42)11月	『思ひ出』	1911年(明治44)6月
	石川啄木	短歌(浅草の凌雲閣に…)	-	スバル	1909年(明治42)5月	-	-
	石川啄木	短歌(紫の袖垂れて…)	-	創作	1910年(明治43)10月	『一握の砂』	1910年(明治43)12月
	石川啄木	短歌(公園の隅のベンチに…)	-	東京毎日新聞	1910年(明治43)7月28日	『一握の砂』	1910年(明治43)12月
	室生犀星	この苦痛の前に額づく	-	感情	1917年(大正6)2月	『愛の詩集』	1918年(大正7)1月
	室生犀星	池	-	-	-	『星より来れる者』	1922年(大正11)2月
	金子光晴	十二階	-	聖潮	1925年(大正14)11月	-	-
	金子光晴	浅草十二階	[1937年(昭和12)以前]	-	-	『路傍の愛人』詩稿	-
銀座をうたった詩	石川啄木	短歌(赤煉瓦遠くつづける…)	-	新天地	1908年(明治41)12月	『一握の砂』	1910年(明治43)12月
	石川啄木	短歌(春の雪…)	-	朝日新聞	1910年(明治43)5月16日	『一握の砂』	1910年(明治43)12月
	石川啄木	短歌(京橋の菟山町の…)	-	朝日新聞	1910年(明治43)5月5日	『一握の砂』	1910年(明治43)12月
	北原白秋	銀座花壇	1910年(明治43)5月	文章世界	1910年(明治43)6月	『東京景物詩及其他』	1913年(大正2)7月
	吉井勇	短歌(うらわかき…)	-	-	-	『酒ほがひ』	1910年(明治43)9月
	吉井勇	短歌(このころは…ああ銀座…)	-	-	-	『昨日まで』	1913年(大正2)5月
	吉井勇	短歌(君とわかれ…)	-	-	-	『仇情』	1916年(大正5)4月
	吉井勇	短歌(君を思ひ…)	-	-	-	『東京紅燈集』	1916年(大正5)5月
	吉井勇	醉狂録 序	-	-	-	『生い立ちの記』	1928年(昭和3)
	堀口大学	夏の日のなまけもの	-	-	-	『月光とピエロ』	1919年(大正8)1月
	萩原朔太郎	虎	-	生理	1933年(昭和8)6月	『水島』	1934年(昭和9)6月
	萩原朔太郎	繁華の幻	-	四季	1947年(昭和22)12月	『近代悲傷集』	1952年(昭和27)5月
新宿をうたった詩	萩原守衛	萩原守衛	1936年(昭和11)8月28日	詩洋	1936年(昭和11)10月	-	-
	西条八十	東京行進曲	1929年(昭和4)5月	-	-	-	-
	サトウ・ハチロー	新宿ムーン・ルージュ (劇団歌)	1932年(昭和7)ころ	-	-	-	-
	関根弘	超高層	-	使者	1979年(昭和54)7月	『新宿詩集』	1980年(昭和55)9月